2016 年度言語研修「琉球語」

成果報告書

Intensive Language Course 2016 The Ryukyuan

Languages: basic vocabularies and grammatical outlines

新永悠人・下地理則・占部由子（編）

東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所

2016

序文

本研修は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（以下 AA 研）主催の言語研修「琉球語」（2016 年度）の成果をまとめたものである。言語研修はこれまでそのほとんどが少数言語の語学研修として位置づけられて来た。その場合、研修前に学習用テキストが用意される。しかし、本研修は語学研修ではなく、琉球語を題材としたフィールドメソッドの研修であり、受講生は研修を通して、琉球語のフィールド言語学的な調査を体験し、生のデータをもとにさまざまな分析（音素分析、形態素分析など）を行った。よって、通常の言語研修と異なり、言語研修前には対象言語（琉球語）の文法や音声の調査に役立つ参考資料および調査票（基礎語彙調査票と文法調査票）のみが配布され、研修後に、各受講生の分析結果をまとめたものを成果物として集成した。その成果物が本報告書である。

本研修は 2016 年の 8 月 16 日から 8 月 29 日までの土・日を除いた合計 10 日間（研修時間の合計は 50 時間）行われた。前半の 5 日間は南琉球宮古島池間方言、後半の 5 日間は北琉球奄美大島湯湾方言を題材にフィールドメソッドの研修を行った。前半のネイティブ講師は仲間博之氏（池間方言）で、後半は直三男也氏（湯湾方言）が担当した。また、前半の担当教員は下地理則（九州大学准教授）、後半は新永悠人（成城大学非常勤講師）で、アシスタントとして占部由子（九州大学大学院生）が参加した。受講生は学部生から院生までの計 11 名であった。場所は AA 研の 2 教室（ガラス戸で仕切られ、両方に行き来可能）を同時に使用し、一方の教室を調査用、もう一方の教室を相談用に用いた。受講生 11 人が 3 名ずつの 4 班に分かれ（2 名から成る班には占部由子が補助として参加した）、1 班ずつ調査用の部屋に待機しているネイティブ講師を訪ねて面接調査を行い、待ち時間に相談用の部屋でメンバー同士の確認や相談を行い、適宜教員がそれをサポートした。前半と後半の初日に各方言の注目ポイント（特に音声）を伝え、一日の最後には質問や情報の補足のための時間を設けた。前半と後半の最終日には各班の成果報告を実施した。

本研修で扱った方言は北琉球奄美大島湯湾方言と南琉球宮古島池間方言である。これらの方言については、大部の記述文法書がすでに刊行されており（成果報告の参照文献に挙げられている Niinaga 2014 と林 2013）、琉球語の中でも記述が進んでいるほうである。よって、本研修の成果がこうした先行研究の成果と重なることがないように工夫を行った。まず、これら 2 方言の研究では語彙の研究成果が少ない。よって、研修で行った基礎語彙調査の結果を簡易語彙集の形でまとめた。収集した語彙は、身体部位、親族体系、動作、状態の 4 分野であり、まさに基礎語彙と呼べるものであると同時に、前者 2 分野は名詞、後者 2 分野は動詞・形容詞にほぼ対応するものであるから、文法の概要を知る上でも重要な語彙である。多くの語彙項目には例文がついており、それも文法

記述を進めるうえで重要なデータとなる。受講生は、フィールドメソッドの一環としてSIL の Lexique Pro（語彙集作成のフリーソフト）の操作法を学び、語彙データを語彙集に編集・出力した。提出された原稿において、内容面について明らかな誤りであると講師が判断したものは講師の判断により修正を加えた。形式面のチェックは、アシスタントの占部由子が行った。その後、原稿に電子出版上の技術的な修正を加える必要が生じたため、さらに梅田遼氏（東京大学大学院生）にアルバイトを依頼し、表記上の不統一のチェックと修正作業を依頼した。その際、最終的に修正すべきかどうかの判断は新永が行った。

語彙に加えて、本報告書では文法トピック別（人称代名詞、指示代名詞、動詞、形容詞、疑問文、名詞述語文、主要項の格、周辺項の格、ボイス、複文）の対照言語学的論考を収録している。各受講生が関心を寄せる文法事項を 1 つ選び、それを 2 方言で比較し、さらに標準語とも比較するという論考である。本研修の目玉は、南北琉球を代表する 2 方言（奄美大島方言と宮古方言）をともに学べるというものであったから、調査した受講生自身がこれら 2 方言をトピック別に比較することは琉球語学的にも有意義であり、またこれまでそのような研究はなかった。受講生の多くは修士課程以上の大学院生であり、それぞれ専門とする領域は異なる。このこともまた、新たな視点による琉球語の分析を可能にしているといえる。もちろん、受講生にとっては初めての言語の分析ということもあり、専門的な意味で不十分な点もあるが、なるべく正確な情報を盛り込むため、以下の工夫を行っている。まず、研修後 1 か月程度経過したのち、フォローアップミーティングを行い、第一稿を持ち寄って発表を行うことにより、担当講師と受講生同士で内容面をチェックする機会をもった。さらに、フォローアップミーティングのあと、受講生は第二稿を提出し、担当講師が内容面を、アシスタントの占部由子が形式面をチェックし、修正などを行った。

本研修はフィールドメソッドを中心にした初めての言語研修として、全受講生が無事修了し、各自の最善の成果報告を行ったという意味で、成功裡に終えることができた。それには何よりもまず、ネイティブ講師のお二人、仲間博之氏と直三男也氏に心から感謝したい。連日、朝から夕方までの質問攻めに根気よく丁寧に答え続けていただいたことが今回のフィールドメソッド研修の土台を支えており、それなしには本研修は在り得なかった。さらに、能動的、積極的に研修に参加し続けてくれた受講生たちにも心から感謝する。彼らのたゆまぬ熱意があったおかげで、方法論の教授という幾分難しい営みを実行することができた。最後に、このような研修の機会を設けてくださった AA 研および教員・職員のみなさまに心から御礼申し上げる。どうもありがとうございました。

2016 年 11 月　編者一同

目次

序文 …… 1

1 章　例文付き簡易語彙集 …… 5
宮古語池間方言例文付き簡易語彙集 …… 6
池間方言【身体語彙】 …… 7
池間方言【親族語彙】 …… 11
池間方言【動作語彙】 …… 15
池間方言【状態語彙】 …… 22

奄美語湯湾方言例文付き簡易語彙集 …… 26
湯湾方言【身体語彙】 …… 27
湯湾方言【親族語彙】 …… 32
湯湾方言【動作語彙】 …… 36
湯湾方言【状態語彙】 …… 42

2 章　文法トピック別対照言語学的論考集 …… 45
麻生玲子
「湯湾方言及び池間方言の名詞述語文について」…… 46

占部由子
「ヴォイス現象についての比較」 …… 50

奥真裕
「池間方言と湯湾方言の疑問の終助詞」…… 56

加藤幹治
「琉球語池間方言、湯湾方言及び日本語共通語における格体系と主要項に関する記述と比較」 …… 62

黒島規史
「北琉球奄美語湯湾方言と南琉球宮古語池間方言の形容詞」…… 68

呉唯
「湯湾方言と池間方言の副詞節に関する一考察」…… 75

Sakuma Atsushi（佐久間篤）
Peripheral Cases and Dativish Cases in Japonic Languages -Ikema, Yuwan and Tokyo- …… 83

陶天龍
「宮古語池間方言と奄美語湯湾方言の動詞活用」 …… 89

林智昭
「池間・湯湾方言の補助動詞構文に関して」 …… 96

原礼実
「池間方言と湯湾方言の指示代名詞」 …… 98

谷津もゑり
「宮古池間方言・奄美湯湾方言・日本語標準語における人称代名詞」 …… 103

1 章

例文付き簡易語彙集

宮古語池間方言
例文付き簡易語彙集

池間方言

【身体語彙】

a

aka *n.* かみ（髪）.

akagiː あかげ（赤毛）.

aumiː *a.* どきょうのない（度胸のない）. baː aumiː 私は度胸がない.

b

bata *n.* はら（腹）. bata nu jamjuː お腹が痛い. janabata 根性が悪い人、いきなり怒ることがある人. karaː janabata du 彼は嫌な人だ（だめななお腹の人だ）. *Note:* [bata nu jamiːui]が[bata nu jamjuː]に変化。[karaː janazumu bitu du]「彼は嫌な人だ」。[kundʒau]「だめな根性」（良い意味ではない）。

ç

çigi *n.* ひげ（髭）. futsu çigi 口髭.

çizu *n.* ひじ（肘）.

d

dzɨburu *n.* あたま（頭）.

f

futsu *n.* くち（口）. fai futʃa ɲaːn 食べる口がない（仕事がない）. *Note:* [munu fau dzjara ɲaːn]（ご飯を食べる皿がない）も同様の表現

futai *n.* ひたい（額）. fuːtai おおきなおでこ. *Note:* çitaiでも可

ffugaː いろぐろ（色黒）.

ffugiː くろげ（黒毛）.

fumiːgama *n.* ひとみ（ひとみ）.

h

hana *n.* はな（鼻）.

hana *n.* はな（花）.

haː *n.* 歯.

hana nu ana *n.* はなのあな（鼻の穴）. hana nu ana ssagi 鼻の穴をふさぐ.

hanadara *n.* はなたれ（洟垂れ）.

hassuː *n.* はなくそ（鼻くそ）. hassuː tui 鼻くそを取れ.

j

jakata bata *n.* わきばら（わき腹）. ba ga jakata ndu ba ga kabannai/kabannu ai 私の横に私の鞄がある. *Note:* [badda]「脇の下」

k

kan *n.* かに. ibi kan エビ.

kanamai *n.* あたま（頭）.

karazɨ *n.* かみ（髪）.

katamusu *n.* かた（肩）. *Note:* [ʃibira]「腕の根っこ」の上の部分をいう。

kusugu *n.* せなか（背中）. *Note:* kusu「背中下部（腰の周辺）」+gu「甲（亀の甲、背中の甲）」

kṵsu *n.* こし（腰）. *Note:* kusuは「（自分自身にとっての）後ろ」の意。kusuは「背中下部（腰の周辺）」、ʃibiraは「背中上部（肩甲骨周辺部）」という上下の対立がある。

kamatsɨ̥ *n.* ほほ（頬）. kamattʃa gaba 頬は大きい.

m

maju *n.* まゆ（眉）.

miː *n.* め（目）. ssumiː 目の白い部分.

matsɨgiː *n.* まつげ.

matsɨgi *n.* まつのき（松の木）.

maibaː *n.* まえば（前歯）. *Note:* mai（前）-haː（歯）連濁

min *n.* みみ（耳）. min nu ana 耳の穴.

mimbaɲi *n.* みみ（耳）.

mihana *n.* かお（顔）. mihana ttakaindo 顔を叩かれるぞ.

mihaɲan *adj.* はずかしい（恥ずかしい）. *Note:* mi（目）-hana（鼻）-ɲan（ない）

mmi *n.* むね（胸）. *Note:* [mmiutsu]ともいう。[tsumu]で「心」を表す。

mmbu *n.* へそ（臍）.

n

nada *n.* なみだ.

nnaːgja *adv.* まだ.

nna *n.* かい（貝）.

nna *a.* ない.

ntsuː *n.* しる（汁）.

nnantsuː *n.* ぐなしじる（具無し汁）.

nudu *n.* くび（首）. *Note:* 最初の[n]が長めに聞こえることがある

nudu *n.* うなじ.

nudugura *n.* くびのぜんぽう（首の前方）. *Note:* 喉仏の周辺部を含めた箇所

s

ssugaː いろじろ（色白）.

ssuba *n.* くちびる（唇）. ssu ba dara 唇が垂れている.

ʃ

ʃiː *n.* せ（背）. ʃibira buni 背骨. ʃibira 腕の根っこ.

t

tsɨmi *n.* つめ（爪）.

tibi *n.* しり（尻）. *Note:* [tibi] は[tibi tai] [tiri] [tiri tai]ともいう。

tiː *n.* て（手）.

tiri *n.* しり（尻）. *Note:* [tiri]は[tiri tai] [tibi] [tibi tai] ともいう。

u

udi *n.* うで（腕）.

utsɨbaː *n.* 奥歯.

utugai *n.* あご（顎）.

un *n.* ウニ. *Note:* [katszu] [un]どちらも「ウニ」を表す。

ʔ

ʔta *n.* した（舌）.

池間方言

【親族語彙】

a

agu *n.* ともだち（友達）. agugama 友達（親しみを込めて）. *Note:* 特に同級生の場合、またdusuとも

akavva *n.* あかちゃん（赤ちゃん）.

akjauda *n.* しょうにん（商人）.

ani *n.* あね（姉）. aɲaː butuː mutɨː hariː ɲaːn 姉は結婚しに行った.

aniuttu *n.* しまい（姉妹）. unu aniuttu jama ŋkai tamunuasuga その姉妹は山に薪取りに行った.

aːguʃa *n.* しまうたのうたいて（島唄の歌い手）.

b

bauzɨ *n.* おぼうさん（お坊さん）.

bikidunvva *n.* むすこ（息子）. bikidun vvaː giddʒaçirain 男の子はコントロールできない（言うことを聞かない）. *Note:* bikidun + ffa（男＋子）→bikidun vva

bikijarabi *n.* しょうねん（少年）.

bitsɨzɨmanuhitu *n.* がいこくじん・よそもの（外国人・よそ者）.

buba *n.* おば（伯母）. bubaː hai ŋkai nkadiga hariː ɲaːn おばは畑に芋ほりに行った.

budʒa *n.* おじ（伯父）. budʒaː zuː sukasu ga hariː ɲaːn 伯父は（鋤で）畑を耕しに行った.

butu *n.* おっと（夫）. ba ga butu kanaibitu 私の夫は働きもの.

bakamunu *n.* わかもの（若者）.

f

ffa *n.* こ（子）. baː ffaː itsɨnu çitu uri 私は子供は５人いる.

ffanmaga *n.* しそん（子孫）.

fubbito *n.* おとな（大人）.

futaka *n.* ふたご（双子）.

fuːja *n.* ちょうなん（長男）.

g

gama ちゃん（指小辞）. midungama 女の子. çirogama ひろちゃん（人名 + gama）.

gisɨ *n.* めしつかい（召使い）. *Note:* matagisɨとも言う

h

harauzɨ *n.* しんせき（親戚）. karaː banti ga harauzɨ 彼は私達の親戚. *Note:* harauzɨは近い親戚を指す

harujaː *n.* のうか（農家）.

haː *n.* そぼ（祖母）. banti ga haː ja tsimukagi çitu 私達の祖母は心の良い人. *Note:* ha/pa/paːとも言える

haːni *n.* ちょうじょ（長女）.

i

iʃa *n.* いしゃ（医者）. *Note:* ʃiːʃiː（先生）とも言う

inʃaː *n.* りょうし（漁師）.

itʃufu *n.* いとこ.

j

jarabi *n.* ようじ（幼児）.

jumi *n.* よめ（嫁）.

m

mamasa *n.* けいふ（継父）.

mataitʃufu *n.* はとこ.

matanmaga *n.* ひまご（曾孫）. vvaː matan magaː ifutaːi uri あなたは曾孫は何名いる.

mau *n.* せんぞ（先祖）.

maːmamma *n.* けいぼ（継母）.

miduɲarabi *n.* しょうじょ（少女）.

midunvva *n.* むすめ（娘）. midun vvaː utunasɨ 女の子はおとなしい. *Note:* midun + ffa（女＋子）→midun vva

mjuːi *n.* おい（甥）. *Note:* めい（姪）も指す

mma *n.* ははおや（母親）. mmaː hai ŋkai hariː ɲaːn 母は畑に行った.

mmazza *n.* りょうしん（両親）. ba ga mma zza gandʒu 私の両親は元気. *Note:* zza mmaも言える

munusɨː *n.* のろ・ゆた（ノロ・ユタ）.

muku *n.* むこ（婿）.

n

naka *n.* じなん（次男）.

nakaːni *n.* じじょ（次女）.

nasɨttʃa *n.* すえっこ（末っ子）.

nusɨdu *n.* どろぼう（泥棒）.

s

sajafu *n.* だいく（大工）.

soumu *n.* そんちょう（村長）. *Note:* azatʃou, kutʃouとも言う

ssari さま（様）. zzassari お父様.

sudʒa *n.* あに（兄）. banti ga sudʒaː jabbja 私達の兄は怖い.

sɨma *n.* むら（村）.

sɨnbitu *n.* しにん（死人）.

sɨtumamma *n.* しゅうとめ（姑）.

sɨtumazza *n.* しゅうと（舅）.

sɨmanuçitu *n.* じゅうみん（住民）.

ʃ

ʃiːʃiː *n.* せんせい（先生）. ʃimudʒi ʃiːʃiː ja tsɨmukagi çitu 下地先生は優しい人だ.

ʃiːtu *n.* せいと（生徒）.

t

tuzɨ *n.* つま（妻）. ba ga tudʒa aparagɨ 私の妻は美人.

tuzɨbutu *n.* ふうふ（夫婦）. kanukja ga tuzɨ butu itsɨmai kanasɨgimunu あの夫婦はいつも仲が良い. *Note:* butu tuzɨは言えない

u

uja *n.* そふ（祖父）. banti ga ujaː umukutuai çito 私達の祖父は頭の良い人.

ujaffa *n.* おやこ（親子）. unukja ga ujaffa aːnu ja tʃarabariː doː その親子は顔がそっくりだ.

uttu *n.* おとうと（弟）. ba ga uttu munuijugjaː tsɨkan 私の弟は言うことを聞かない. *Note:* いもうと（妹）も指す

utudʒa *n.* しんせき（親戚）. karaː banti ga utudʒa 彼は私達の親戚. *Note:* utudʒaは遠い親戚を指す

umukutuai *n.* がくしゃ（学者）. *Note:* suguribitu とも言う

v

vva *n.* きみ（君）.

z

zza *n.* ちちおや（父親）. ba ga zzaː inʃa doː 私の父は漁師ですよ.

zɨnusɨ *n.* じぬし（地主）.

池間方言

【動作語彙】

a

agiː *v.* あげる（上げる）. timaː ju agidakaː munu u faːin 手間（賃金）を上げないと飯は食えない.

ai *v.* いう（言う）, うたう（歌う）. nau jarabammai addʒi なんでもいいから言え. aːgu u ai 歌を歌う. kai ŋkai ja masagun tiː addʒiː naraːʃi 彼にはちゃんと言って指導しなさい.

aifu *v.* あるく（歩く）. mme dariː aikain もう疲れて歩けない.

akiː *v.* あける（開ける）. jadu u akiru 戸を開けなさい.

arai *v.* あらう（洗う）. nn nu arai 芋を洗え.

asuː *v.* あそぶ（遊ぶ）. asuː ga ikadi 遊びに行く. jarabi a asuba du umukutu idiː 子供は遊ぶからこそ知恵がつく.

asɨ *v.* する. kunu namadan jarabi beŋkjoː ju assu tiː aitigaː beŋkjoː ju assu この怠け者、勉強をやれと言ったら勉強をやれ。

asɨ busɨ *a.* したい. bam mai sanʃin nu asɨ busɨ 私も三線をしたい.

asɨ hazɨ しそうだ. kari a aparagi midun tu hanasɨ asɨ hazɨ 彼は美人と話すだろう.

asɨmi *v.* させる. uri a uibitu nu sɨkama, ui n asɨmiru それは年寄りの仕事、彼にさせる.

atai *v.* あたる（当たる）. takarafusɨ nu ittoːʃoː n atariː ɲaːn 宝くじの一等賞に当たった.

atarasɨ *v.* 当てる. haku nu naka nu munu u nauga tiː ataraʃi 箱の中の物は何か当てよ.

atsɨfu nasɨ *v.* あたためる（温める）. kareː ja atsɨfu nasɨba du mma kai カレーは熱くすれば旨くなる.

atsɨmi *v.* あつめる（集める）.

awati *v.* いそぐ（急ぐ）. maː nu awatida uri あまり急がないで.

b

bakau *v.* うばう（奪う）. juːgaː kai çitu nu munu u gjaː bakaːn 弱い者のものをば奪わない.

bakiː *v.* わける（分ける）. munu u gjaː nnna çi du bakiː fau 食べ物をばみんなで分けて食べる.

bidʒiː *v.* すわる（座る）. tatʃi tiː asɨtigaː tatʃi, bidʒi tiː asɨtigaː bidʒi 立てと言ったら立て、座れと言ったら座れ.

ç

çigurasɨ *v.* ひやす（冷やす）. akabataui ja çigurasɨba du mma kai スイカは冷やした方が旨い.

çinarasɨ *v.* へらす（減らす）. ɲiŋgim mai munu mai çinarahai ɲaːn 人間も物も減った.

çiŋgi *v.* にげる（逃げる）. nusudu mmi çiŋgiru 泥棒たち逃げろ.

çiː fiː *v.* してあげる. kari a kataː jaiba nau ju mai çiː fiːru 彼は不具者だから何でもしてあげなさい.

çiː sɨtinasɨ *v.* してしまう. kjuː asɨ gamata nu kutu gjaː kjuː çiː (du) sɨtinasɨ dara 今日やるべきことは今日でやってしまうんだよ.

çiː ui *v.* している. ba a dusɨ tu jugatai ju çiː ui 私は妻と懇談している。

d

ddʒiː *v.* もらう. ddʒibammai hukarasɨ. fiːtigaː mme çiː hukarasɨ もらっても嬉しい。あげたらもっと嬉しい。

f

fiː *v.* あげる. ddʒibammai hukarasɨ. fiːtigaː mme çiː hukarasɨ もらっても嬉しい。あげたらもっと嬉しい。

futsɨ *v.* ふく（吹く）. kadi nu futsɨ 風が吹く. bura u futsɨ ホラを吹く. *Note:* fufuとは言えない

futsɨ *v.* ふく（拭く）. munu u fai nu atu n na fut tʃu fuki ご飯を食べた後には口を拭け.

fuː *v.* かえる（帰る）. kari a ssara kara du muduriː fuː 彼は平良から戻って帰った.

fuː *v.* くる（来る）. sannaŋ ga du utsɨnaː kara fuː 三男が沖縄から来る（帰る）.

h

hai *v.* かえる（帰る）. jaː ŋkai hai 家に帰る.

hanari *v.* はなれる（離れる）. fuɲi a nnatu kara hanariː hariː ɲaːn 船は港から離れて行った.

hanasɨ *v.* ほどく. matsɨddari uː itu u hanaʃi まつわっている糸をほどけ.

hanasɨ *v.* はなす（離す）. unu bikidun tu midun nu hanaʃi その男と女を離せ.

haːsafu nasɨ *v.* ふやす（増やす）. din na naubai asɨba du haːsafu nasɨrai? 金はどうすれば増やすことができるか？.

hudakaː naran *v.* しなければならない. sɨkama a hudakaː naran 仕事はしなければならない.

husɨbussa asɨ *v.* ほしがる（欲しがる）. maː nu çitu nu munu u husɨbussa asuna あまり他人の物を欲しがるな.

husɨ *v.* ほす（干す）. tsɨn nu husɨ 着物（服）を干す.

i

idasɨ *v.* だす（出す）. unu gizɨgjauna jarabi u gjaː ara ŋkai ja idasɨna このいうことを聞かない子供をば外に出すな.

iddi *v.* いきる（生きる）. iddidakaː naran, sɨɲi ja dami 生きないとならない、死んだらダメだ.

ifu *v.* いく（行く）. utsɨna: ŋkai ja itsɨ ikadi? 沖縄にはいつ行くか？.

idi: *v.* でる（出る）. kari a çitumuti idi: hari: ɲa:n 彼は朝出て行った.

iri: *v.* いれる（入れる）. ami jaiba ara nu jarabi u gja: naka ŋkai iriru 雨だから外の子をば中に入れなさい.

j

javvasɨ *v.* つぶす（潰す）. jariguruma a javvaçi: sɨti: ɲa:n 中古車は潰してしまった.

javvi *v.* やぶる（破る）.

jun *v.* よむ（読む）, かぞえる（数える）, しゃべる（喋る）. hun nu jun 本を読む.

k

kafu *v.* かく（書く）. kitsɨkigi zɨ ju kaki 綺麗な字を書け.

kaki: *v.* かける. hana ŋkai mid dʒu kakiru 花に水をかけなさい.

kakumi *v.* かこむ（囲む）. zzu u gja: an çi du kakumi: tui 魚を網で囲んでとる.

kaŋgai *v.* かんがえる（考える）. unu sɨ:gaku nu mondai ju kaŋgai mi:ru この数学の問題を考えてみなさい.

ka:i *v.* かえる（変える）. amerikaju: kara jamatuju: ŋkai ka:rai hari ɲa:n アメリカ世から大和世に変わっていった.

ka:kasɨ *v.* 乾かす. zzu u ka:kasɨ 魚を乾かす.

kimi: *v.* きめる（決める）. atʃa a seŋkjo, taru ŋkai ididiga kimidaka: naran 明日は選挙、誰に投票するか決めないとならない.

kizan *v.* きざむ（刻む）. huɲa u fau jasɨ ga ɲa:n kizami mi:ru 大根を食べやすいように刻みなさい.

kui: *v.* こえる（越える）. fuzɨmmijama u kuitiga: uma a hura 富士嶺を超えたらそこは大浦.

kumari *v.* こもる（籠る）. nanamu nu ba:ta a utaki n mi:ka mai kumai 7杜のおばあさん達は御嶽に3日間も籠る.

kurugasɨ *v.* ころがす（転がす）. unu bo:ru u kuma ŋkai kurugaʃi そのボールをここに転がせ.

kaffasɨ *v.* かくす（隠す）. taru ga du ba ga kuruma nu kagi a kaffaçi: ɲa: 誰が俺の車のカギを隠したか.

kaffi *v.* かくれる（隠れる）. nusudu mmi kaffiru 泥棒たち隠れろ.

m

maifu nari *v.* ちかづく（近づく）. saugatsɨ mai maifu nari: ɲa:n 正月も近づいた.

marufu nasɨ *v.* ちぢめる（縮める）.

mbjai *v.* たえる（耐える）. ujakja:ma:ru, kibansa u gja: waiti: mbjautai 人間万事塞翁が馬、貧乏をばしっかりと耐えた。

miʃi: *v.* みせる（見せる）. vva ga pen nu miʃi: fi:ru あなたのペンを見せてください. vva ga çindʒa u miʃiru あなたの山羊を見せろ.

mi: *v.* みる（見る）. n̥nu ʃi:ʃi: ju mi:tai 昨日先生を見た. uru u mi:ru それを見なさい.

mudusɨ *v.* もどす（戻す）. uri a damina munu jaiba muduhadi これはダメなものだから戻します.

mujukasɨ *v.* うごかす（動かす）. gaba: is sa mujukahain 大きな石は動かせない.

mutʃiː fuː *v.* もってくる（持ってくる）. kari a itsɨmai tsɨtu u mutʃi: fu: 彼はいつもお土産を持ってくる.

mutsɨ *v.* もつ（持つ）. unu ssu u muti この魚を持て.

muːsɨ *v.* もやす（燃やす）. tamunu u muːsɨ 薪を燃やす.

matsɨ *v.* まつ（待つ）. uri a junnaçi: çitu jaiba uri u gja: matsɨna 彼はゆっくりの人だから（いつも遅れるから）彼をばまつな.

mmasɨ *v.* ぬらす（濡らす）. ka: ŋkai hairi: mmaçi: ɲaːn 川（井戸）に入って着物は濡らしてしまった.

n

naddʒui *v.* うつ（打つ）. batto çi: boːru u naddʒuri: miːru バットでボールを打ってごらん.

nafu *v.* なく（泣く）. tsɨːfaivva nu naki ui 赤ちゃんが泣いている. natsɨddʒaffa a umukutu ai munu 泣き虫は頭が良い.

namai *v.* やめる. sɨkama u gja: namarasɨna 仕事をやめるな.

namai *v.* とまる（止まる）. bas sa namari ɲaːn バスは止まった.

namarasɨ *v.* とめる（止める）. kuruma u gja: namarasɨna 車を止めるな.

nausɨ *v.* なおす（直す）. unu jariguruma u nauçi: fiːru この中古車を直してくれ.

ndari *v.* やぶる（破る）. unu tsɨn na ndari: du この服は破れている.

nuːi *v.* のぼる（登る）. dʒoː, kju: ja jama ŋkai nuːradi さー、今日は山に登ろう。

nuːi *v.* のる（乗る）. kuruma n nuːri 車に乗れ.

nai *v.* なる. waiti: asɨba du kutu u nai 一生懸命にやれば事は成る.

s

sagiː *v.* さげる（下げる）. uri u çitʃagama sagiru これをちょっとだけ下げろ.

sasui *v.* さそう（誘う）.

satsɨ *v.* さく（裂く）. kabi: ju satsɨ 紙を裂く.

suvvasɨ *v.* はしる（走る）. suvvaçi: kari u tui ku: 走ってあれを取ってこい.

sɨkjakiː *v.* はじめる（始める）. dʒoː, çiːmamunu mai fai ɲaːnba sɨkama u sɨkjakidi さー、昼飯も食べたから仕事を始めよー.

sɨkjaːrasɨ *v.* ちらす（散らす）. hun nu gja: sɨkjaːrahada uri 本を散らかすな.

sɨtiː *v.* すてる（捨てる）. din na nnna sɨti: ɲaːn 金は全部なくした（捨てた）.

sɨːi *v.* しる（知る）. hun na jumi du kai ga kutu gja: siːtai 本を読んで彼のことを知った.

t

takubi *v.* かたづける（片付ける）. futon nu takubiru 布団を片付けなさい.

takubi *v.* しまう. oi, huton nu takubi namadan jarabi おい、布団を片付けろ、怠け者.

tamisɨ *v.* ためす（試す）. çirain mu nau mu ui çi: tamiçi: mi:ru できるか否かそれで試してみなさい.

tanun *v.* たのむ（頼む）. kai ŋkai ja nau mai tanumain 彼には何も頼めない.

tatsɨ *v.* たつ（立つ）. tatʃi ti: asɨtiga: tatʃi, bidʒi ti: asɨtiga: bidʒi 立てと言ったら立て、座れと言ったら座れ.

tivvi *v.* なげる（投げる）. is su tivvi 石を投げろ.

tsɨfu *v.* きく（聞く）. una ga du: çi: tsɨki 自分自身で聞け. çitu nu hanas su tsɨfu 人の話を聞く.

tsɨmudi *v.* おこる（怒る）. n̥nu ʃi:ʃi: ja tsɨmuditai 昨日先生は怒った. kari a itara:n munui ja addʒa:i: tsɨmudi ɲa:n 彼は馬鹿なことを言われて怒ってしまった. *Note:* tsɨmu（心）+idi（出る）から

tsɨzɨmasɨ *v.* ちぢめる（縮める）. aija ma:nu tsɨzɨmasɨna そんなにあんまりと縮めるな.

tsɨ: *v.* きる（着る）. tsɨn nu tsɨ: 服を着る. kju: ja ʔʃi kaiba tsɨn nu tsɨkuki: ttʃi 今日は寒いので着物を重ねて来なさい.

ttatsɨ *v.* たたく（叩く）. taiku u ttatsɨ 太鼓を叩く. mihana u ttatsɨ 顔を叩く. bo:ru u ttatsɨ ボールを打つ. çitu u ttatsɨ 人を叩く.

tui *v.* とる（取る）. ui ga du dʒau kaiba uru u tui それが良いからそれを取れ.

tui *v.* うける（受ける）. kju: arasɨka kara tegami nu fu:ba tui: uki 今日アラスカから手紙がくるから受け取っておけ.

tukasɨ *v.* とかす（溶かす）. mizɨ ŋkai sata u tukaʃi 水に砂糖を溶かせ.

tumi: *v.* さそう（誘う）. kju: ja aparagi midun nu tumiga 今日は綺麗な女性を探し（誘い）に行こう.

tumi: *v.* とめる（止める）.

tu: *v.* とぶ（飛ぶ）. vva a tui ja aranba tin na tubain お前は鳥ではないから空（天）は飛べない.

tu:i *v.* とおる（通る）. kari a kju:dai ŋkai turi: hari: ɲa:n 彼は九大に合格した.

tu:i uffu *v.* とっておく. ba ga tamaumai tu:i ukki u:ki 私の分け前をとっておけ.

tumi: *v.* さがす（探す）. ba ga pen nu tumi: fi:ru 私のペンを探してくれ.

tumi: *v.* みつける（見つける）. din nu tumiru 金を見つけろ.

tsɨtsɨn *v.* つつむ（包む）. tsɨtu u ki: nu ha: çi: tsɨtsɨn お土産を木の葉で包む.

u

ui *v.* おう（追う）. kari a ha: kaiba ui ga tibi a u:in 彼は早いから彼の後は追えない.

ui *v.* すむ（住む）. vva a idʒa nu sɨma n du ui ga? お前はどこの村にいるか？（住んでいるか？）.

uki: *v.* おきる（起きる）. hajamari uki: sɨkama ŋkai hari 早く起きて仕事に行け.

utsɨ *v.* うつ（打つ）.

ukui *v.* おくる（送る）. ami nu ffi: u:ba, kari u gja: kuruma çi: ukuri: ku: 雨が降っているから彼女をば車で送ってこい.

uri *v.* おりる（降りる）. vva a namadaŋ kaiba kuruma kara a uri: aiki お前は怠け者だから車から降りて歩け.

uttsɨ *v.* おく（置く）. uri u gja: uma n ukki kari u gja: kama n ukki それをばそこに置け、あれをば向こうに置け.

ugunaːrasɨ *v.* あつめる（集める）. nn nu ugunairu 芋を集めろ.

ui *v.* いる（居る）. midun na ja: n du ui 女（妻）は家に居る.

w

waitiː asɨ *v.* がんばる（頑張る）. nau ju mai waiti: assu 何事も一生懸命やれ（頑張れ）.

ʔ

ʔʃi *v.* わかる（わかる）. ba a unu hun nu na: ju gja: ʔʃi 私はその本の名前はわかる.

池間方言

【状態語彙】

a

asa *a.* あさい（浅い）.

atarasɨ *a.* たいせつな（大切な）、もったいない.

atsɨ *a.* あつい（暑い）. kjuː ja atsɨ munu 今日は暑い. kjuː ja atsɨkaiba naran 今日は暑くてならん. hnu atsɨkaiba naraddan 昨日暑くてならなかった.

b

bai *a.* わるい（悪い）. ba ga du bai katai 私が悪かった.

baka *a.* わかい（若い）. jagui baka 非常に若い. bakaː vvaː baka munu あなたは若い人だ. vvaː baka munu あなたは若い人だ. bakaːbakajaː 若々しいわねー.

bida *a.* ひくい（低い）. *Note:* ssaとも言う

ç

çiːtʃa(çiːsa) *a.* すくない（少ない）. çiːtʃagama とても少ない. mai ja çiːtʃagama(çiːtʃakai) ご飯が少ない. çiːtʃagamanu din 少ないお金.

d

dami *a.* わるい（悪い）.

dzau *a.* よい. dzau munu よい. dzaukai よい.

f

f(f)ai *a.* ふとい（太い）. kai ga du f(f)aikai 彼の方が太っている. *Note:* f(f)aiには肥料の意味もある

fka *a.* ふかい（深い）. fka in 深い海.

fukurasɨ *a.* うれしい（嬉しい）. baː kjuː ja fukarasɨ 私は今日嬉しい. mitʃaːitu çitumi beŋkjoː çirai fukarasɨ 3人と一緒に勉強できて嬉しい. *Note:* hukarasɨも可。cf. 日本語の「誇らしい」

g

gabaː *a.* おおきい（大きい）. hugabaː とても大きい. *Note:* 広い、太いなども表す

giz‡ gjauna *n.* いたずらっ子. ba ga uttuː giddza çirain giz‡ gjauna 私の弟はコントロールが効かない（きかんぼうだ）.

h

haː *a.* はやい（速い）. kara ha 彼は速い. kara haː bito 彼は足の速い人だ. kai ga du haː kai 彼の方が速い. haː budʒagama 足速おじさん.

haːsa *a.* おおい（多い）. okusaŋkai ja zzuːgja(n) haːsa fiːru 奥さん（人名）にはたくさん魚をあげなさい. inʃaː kara haːsa zzuː dʒiru 漁師からたくさん魚をもらいなさい. (jagumi/muitu) haːsanu din （とても）多いお金.

husu *a.* ほそい（細い）. husu bito 細い人. husu munu 細い人. kaːbiːja husu(kai) 紙は薄い.

i

imi *a.* ちいさい（小さい）. imigama かわいい子. imi çitogama 小さい人.

j

jagumi *adv.* とても. (jagumi/muitu) haːsanu din （とても）多いお金.

jamagu *n.* ぼうりょくてきなひと（暴力的な人、乱暴者）.

jari *a.* ふるい（古い）. jari kaban 古いかばん. jari zɨn 古い着物. jari guruma 古い車. inna gaba(kai) 犬は年老いている.

jana bitu *n.* 悪い人.

k

kamarasɨ *a.* かなしい（悲しい）. midun(n) miffasa çirai kamarasɨ 女に振られて（嫌われて）悲しい.

kaːma *a.* とおい（遠い）. kama nu jaː ja juː kamajaː あそこの家はとても遠い家だ. kama kaːmakaiba ikadzaːn あそこは遠いから行かない. kama(ː) kaːma(kai) むこう（は）遠い.

m

mai *a.* ちかい（近い）. kanuki ga jaː ja muitu maikaːma あの人の家はひどく付き合いがない. kumaː mai(kai) こちらは近い. mai ja çiː itsɨ jasumunu 近いから行きやすい. maikai jaː 近い家. mai kaːma 近いけど遠い、付き合いが少ない.

midun *n.* おんな（女）. kuraː ba ga midun これは私の女（妻）だ.

maru *a.* みじかい（短い）. maru skaːto(gama) 短いスカート. skaːto (no) marukai スカートが短い.

miː *a.* あたらしい（新しい）. miː kaban 新しいかばん. miːkai kanannu tui （複数あるカバンから）新しいカバンを取れ. unu tukeija miː tukei その時計は新しい時計だ. uiga du miːkai これが（この方が）新しい.

muitu *adv.* とても. (jagumi/muitu) haːsanu din （とても）多いお金.

n

naga *a.* ながい（長い）. naga ntsɨ 長い道. naga nudu 長い首、首長. naga aka(karazɨ) 長い髪. naga nudu juːsa 長い首のサギ.

s

ssu *a.* ひろい（広い）. *Note:* gabaːも使う

ʃ

ʃiba *a.* せまい（狭い）. *Note:* imiも使う

ʃʃi *a.* 寒い. ʃʃi munu 寒い.

t

takaː *a.* としおいている（年老いている）.

takaː *a.* たかい（高い）. taka bitu 背が高い人.

u

uda *a.* ふとい（太い）. kai ga du udakai 彼の方が太っている.

奄美語湯湾方言
例文付き簡易語彙集

湯湾方言

【身体語彙】

a

agi *n.* さかなのえら（魚のえら）.

agu *n.* あご（顎）. jubɨnu ikjanu katasanu sɨkamaja agunu jamjuddo: 昨日のイカが硬かったから今朝は顎が痛いよ。

ama *n.* あちら（あちら）. amakatʃi iʒiti:ki あちらに出ていけ.

asɨ: *n.* あせ（汗）. asɨ: muru katʃussɨgana 汗をたくさんかいているね. urɜ: asɨna:? hasɨtitʃɨna? それは汗か？走ってきたのか？. asɨda:ra: 汗まみれ.

ç

çigi *n.* ひげ（髭）. çigidzɨraja: mi:duguʃanu xɜ:ku sɨtɨko: 髭面は見苦しいから早く剃ってこい。

g

gabu: *n.* おでき（おでき）. gabu:ba muŋkatatto: uminu ʒanasa iʒita おできをいじったら膿がたくさん出た.

h

hada *n.* はだ（肌）. hadagjurasa 皮膚がきれいね. *Note:* hada:も可。

hagi: *n.* あし（足）. haginu uʃiju/hagin ura 足の裏、土踏まず. *Note:* 足全体を指す

hana *n.* はな（鼻）. antʃunu hananu ta:sa あの人の鼻の高いこと。

ha: *n.* は（歯）. uraja ha:ja ikjan nɜnna: あなたの歯はどうもないですか。

x

xɨgɨrɨ *n.* あか（垢）. ɸusu:nu xɨgɨrɨja muŋkanna へその垢をいたずらするな. urija xɨgɨrɨja arannenʃi gundaro:ga これは垢ではなく、ごみじゃないか。 gun.ja aranna ごみじゃないのか？. xɨgɨrɨta:ra: あかみれ.

ɸ

ɸuguru *n.* あか（垢）.

ɸusuː *n.* へそ（臍）. ɸusuːnu xɨgɨrɨja muŋkannajoː へその垢はいたずらするなよ.

i

iki *n.* うろこ（鱗）. ʔjun iki 魚の鱗.

ikja *n.* いか（イカ）.

iː *n.* い（胃）. iːnu jabjui 胃が痛い.

k

kamatʃi *n.* あたま（頭）. kamatʃi nu jamjui 頭が痛い. *Note:* tsɨburuも可。

kamatʃinçigi *n.* かみ（髪）. uraː kamatʃinçigi nu mandɨ aŋkutu uremaʃajaː あなたの髪の多くあることが羨ましい。 *Note:* tsɨburuという言い方はしない。

kao *n.* かお（顔）. *Note:* tsɨraとも言える。

kimu *n.* きも（肝）. *Note:* 心と言う意味もある

koː *n.* かわ（皮）. koːnu kjurasa 皮がきれい. watan koːnu jugoːsa （笑いすぎて）おなかの皮がかゆい（よじれる）.

ku(t)tʃi *n.* くち（口）. kutʃihɜntoː sunna 口答えするな。

kuʃi *n.* こし（腰）. kuʃinu jadɨ nunsuraran 腰が痛くて何もできない.

kubi *n.* くび（首）. kubinu mawaranʃutɨ 首が回らないものだから。

kummɨ *n.* あしあと（足跡）. mjaːnu kummɨ 猫の足跡. ʔtʃunukummɨ 人の足跡.

kutsɨ *n.* くちびる（唇）. *Note:* 歯も唇も含めて kutsɨ

kuːru *n.* こころ（心）. kuːrunu kjurasa 心がきれい. kuːrunu janakusaː 心がきたない. *Note:* kimuという表現もある

kataː *n.* かた（肩）. tɨːnu agaran ʃutɨː katanan jatʃuː jakamba 手が上がらないから肩にお灸をしないと.

m

majugɨː *n.* まゆ（眉）. antʃunu majugɨːnu iːdakkajaː あの人の眉毛はいい格好だね。

min *n.* みみ（耳）. sɨkama xɨːtantukikara minnu jugoːsa 今朝起床したときから耳がかゆい。

mintabuː(raː) *n.* みみたぶ（耳たぶ）. kiɲu minʒassɜː mumutaburaː arannenʃi mintabuːʒata 昨日触ったのは太ももではなく、耳たぶだった。

miŋkusu *n.* みみくそ（耳くそ）.

mumutaburaː *n.* ふともも（太もも）.

mumuː *n.* ふともも（太もも）. mumutaburaː 太ももの柔らかいところ.

mɜntsɨburu *n.* ひたい（額）, おでこ. kurasɨmmɜː nantɨ mɜntsɨburu uttʃiː itʃasanu oːʃiran 暗闇でおでこを打って痛くてしょうがない。 *Note:* mɜŋkamatʃiという言い方も額・おでこに値する。

mɜŋkamatʃi *n.* ひたい（額）, おでこ.

mɜːnu haː *n.* まえば（前歯）. katakkwaʃi kadɨː mɜːnu haːnu zɨŋgitattoː カタカシ（お盆で使う硬いお菓子のようなもの）で前歯がぐらついてしまった。 *Note:* mɜːbaという表現を使うこともある。

mɨntama *n.* ひとみ（瞳）. kurja mɨntamaʃi majugɨːja aran これは目玉で眉毛ではない。

mɨːnujuku *n.* こめかみ. *Note:* 「こめかみ」に当たる語はなし。「目の横」に当たる。

mɨː *n.* め（目）. mɨː akɨtɨː ittʃamma mirɨ 目を開けてよく見なさい。

mai *n.* しり（尻）. warabɨnu mainu juharasaŋkutu 子供の尻のやわらかいことよ.

mari *n.* しり（尻）.

munɨ *n.* むね（胸）. munɨ jaman natɨː juruja nɨburarandoː 胸を病んで夜眠れないよ.

n

nakan *n.* ちょう（腸）. ʔwaːnu nakan 豚の腸.

noː *n.* のう（脳）. noːjamaʃi 頭が痛い. aŋkwanna noːjamaʃidoː あの子には頭が痛いほど悩まされている.

nada *n.* なみだ（涙）. nadakkwa utsɨsɨnajoː 涙流すなよ。

o

okunu haː *n.* おくば（奥歯）. okunu haːnu jadɨ munnu kamarandoː 奥歯が痛んでご飯が食べられない。 *Note:* okubaとも言える。

s

saːbuŋkɨː *n.* とりはだ（鳥肌）. *Note:* kɨːだけでは「毛」を意味しない

sɨnɨ *n.* すね（脛）. sɨnɨ toːraː 「怠け者」. sɨnɨnu tatan 「脛が立たない（仕事をしない生意気もの、怠け者）」. *Note:* sɨnɨːも可

ʃ

ʃibaː *n.* した（舌）. ʔwaːnu ʃibaːja jatʃikamɨbaː massaddoː 舌を噛んで痛い。 ʃibaː kadɨ jamjui 舌を噛んで痛い。

t

tʃi *n.* ち（血）. tʃiːnu iʒitussɨgana 血が出ているんじゃないの？. naː tʃinu iʒiranna 血はもうでないの？. urja tʃiː aranna それは血ではないのか？. tʃiː arantɨkai 血ではなかったか？. kiɲuː mitʃassɜː tʃiː arantɨkai 昨日見たのは血ではなかったか？. tʃiː ʒatakai 血だったか？. *Note:* tʃiːも可

tsɨburu *n.* あたま（頭）. tsɨburubatʃi スズメバチ. *Note:* kamatʃiも可

tsɨra *n.* かお（顔）. tsɨra miriba nabɨxɨgɨrɨ 顔を見れば鍋のすすがついているよ。

tsɨraː *n.* ほほ（頬）.

tsɨmɨː *n.* つめ（爪）. tsɨmɨːnu hagarete jamjui 爪がはがれて痛い. ʃiʃintsɨmɨː イノシシの爪.

tɨ *n.* て（手）. tɨmainu kjurasa 手舞がうまい. tɨŋgama sɨnna いたずらすんな.

tɨkubiː *n.* てくび（手首）. tɨkubiː kikjatʃutɨ kamaja miŋgijoː 手首を利かせてかまをつかみなさい.

tɨː *n.* て（手）. tɨːnu gurusa 手（作業）が早い.

u

uʃiju *n.* うしろ（後ろ）.

umi *n.* うみ（膿）. uminu iʒita 膿が出た. udun aranna 膿んでるんじゃないか. gabuːba muŋkatattoː uminu ʒanasa iʒita おできをいじったら膿がたくさん出た.

un *n.* うみ（海）. uŋkatʃi ikjui 海に行く. untʃi ikjui 海に行く. kjurasan un きれいな海. unnu kjurasa 海がきれい.

un *ad.* その（その）. un aːsammun.ja その赤いのは.

udɨ *n.* うで（腕）. antʃunu sɜːkunu udɨja tarunnin mɜːrandoː あの人の大工の腕前は誰にも負けない. udɨ kumburɜː 腕のこのあたり（肘）.

ujajubi *n.* おやゆび（親指）. antʃuŋkjanu naːnantɜː arɨga itʃiban ujajubidoː あの人たちの中であれが一番親指（親分）だ.

w

wataː *n.* おなか（お腹）. wataːnu jamjui お腹が痛い. wataga jamjui お腹が痛い. wataːnu jugoːsa お腹がかゆい. watan koːnu jugoːsa お腹の皮がかゆい（笑いすぎてお腹がよじれる）. wataippai kamɨ お腹いっぱい食べなさい.

wataː *n.* はら（腹）. antʃunu watanu xɜssa/xɜːsa あの人のおなかは大きい. ɸuːwataː unagu 妊婦さん. *Note:* xɜssaはxɜːsaでも良い。

湯湾方言

【親族語彙】

a

amma: *n.* はは（母）. amma:ja ʔkwe:sugitɨ ʔkinnu kijaran 母は太りすぎて着物が着られない.

anjo: *n.* おにいさん（お兄さん）. jui anjo: 唯（人名）兄さん. *Note:* 名前の後に用いられる（比較的年配の男性に用いる）

a:ʔkwaʔkwa *n.* あかちゃん（赤ちゃん）. a: ʔkwa ʔkwanu marɨtatto: 赤ちゃんが生まれたよ. *Note:* ʔa: ʔkwa でもよい

b

ba: *n.* そぼ（祖母）.

d

duʃi *n.* ともだち（友達）. anttʃuja wan duʃi do: あの人は私の友達だよ. *Note:* 呼びかけにも用いる。

dʒi: *n.* そふ（祖父）. mukaʃi mukaʃi: atanturo:nan dʒi:tu ba:ga utantʃido: 昔々あるところにお爺さんとお婆さんがいたそうだ.

dʒju: *n.* そふ（祖父）.

h

haro:dʒɨ *n.* しんせき（親戚）. ʔurakjato wa:kjaja haro:dʒi dajotto:/dʒatto: あなたたちと私たちは親戚だよ。 *Note:* 「腹が一緒」の意味。由来は「腹氏」。「いとこ」「はとこ」も[haro:dʒi]に含まれる。

ɸ

ɸuttʃu *n.* おとな（大人）. unttʃuja ɸuttʃu do: この人は大人だよ. *Note:* お年寄りも指す

ɸu:suda: *n.* ちょうなん（長男）. amano kjo:dɜ:no ɸu:suda: あそこの兄弟の長男.

j

jumɨ *n.* よめ（嫁）. hajaku jumɨ murawan ba 早く嫁をもらったら？（もらわないといけないよ）.

k

kanaʃanʔtʃu *n.* いとしいひと（愛しい人）. nama wanga: sukini nasantʃu do: 今、私はお付き合いしているよ. *Note:* 上記例文は、このように言うかもしれない、というもの。「恋人」を指す特定の語彙は存在しない。[wa: kanaʃan ʔtʃu]にて「私の恋人」と解釈しうるかもしれない。

kjoːdɜː *n.* きょうだい（兄弟、姉妹）. ingakjo:dɜ: 男兄弟. *Note:* 年下の者に対しての呼称は、名前を「呼び捨て」で呼ぶ。[wunagu kjo:dɜ:]「姉、妹」

m

magaʔkwa *n.* まご（孫）. jui wa: maga ʔkwado 唯（人名）は私の孫だよ.

meː *n.* めい（姪）. miːui 姪と甥.

muhoː *n.* むこ（婿）. amanu jaːnu muhoːja ittʃatto: あっちの家の婿さんはいい人よ。

mɜːrabɨ *n.* しょうじょ（少女）.

n

nan *n.* あなたさま（年上）.

niː *n.* おにいさん（お兄さん）. jui ni: 唯（人名）兄さん. *Note:* 名前の後に用いられる（比較的若年層の男性に対して用いる）

nɜː *n.* あね（姉）. nɜːja hanakokatʃi honba jaratʃa: お姉さんは花子に本をやった.

nɨsɜː *n.* わかもの（若者）. an koroja nɨsɜ: dʒta あの頃は若者だった. *Note:* 「青年」も指す（男性にのみ用いる）

ʃ

ʃutu *n.* しゅうと（舅）. *Note:* 方言形は存在せず、標準語に由来。

ʃutumɨ *n.* しゅうとめ（姑）. *Note:* 方言形は存在しないが、日本語の標準語に由来。

t

tuʃi kata *n.* おとしより（お年寄り）. unttʃuja tuʃi kata この人はお年寄りです.

tudʒi *n.* つま（妻）. antʃunu tudʒija tarɨdʒatɨga あの人の妻は誰だ.

tudʒituː *n.* ふうふ（夫婦）. ʔan taija tudʒituːdo: あの二人は夫婦だよ.

u

ubaː *n.* おば（伯母、叔母）. *Note:* 伯母（父母の姉）、叔母（父母の妹）は、いずれも「名前＋ʔuba:」という形で呼ぶ。

udʒiː *n.* おじ（叔父、伯父）. *Note:* 伯父、叔父（父母の弟）は、いずれも「名前＋ʔudʒi:」という形で呼ぶ。

ujaddai *n.* りょうしん（両親）.

ujakwa *n.* おやこ（親子）. *Note:* [mjan kwa]「子猫」[uʃin kwa]「牛の子」

ujauɸudzi *n.* せんぞ（先祖）. kami uːgamo: jumma, ujaɸudzi (ba) ugamo: 神を拝むよりも、先祖の霊を拝んだ方がよいんじゃない？. *Note:* [uga-mju-i]「拝む」、[ugam-an]「拝まない」

umɨnaʃikwa *n.* すえっこ（末っ子）. tui nu tamagu (ba) nattʃatto: 鳥が卵を産んだよ. *Note:* 「思いを込めた最後の子」を意味する。[ji tʃi ban ʃa nu kwa]「一番下の子」、[umɨ naʃi kwa]（これは、沖縄本島における言い方？）ともいう。

unagɨkjoːdɜː *n.* しまい（姉妹）.

ura *n.* きみ（君）. ura namaeja nu: ttʃi ʔi: jo 君の名前はなんというの. *Note:* 同年齢以下の相手に対して用いる。

ututuː *n.* おとうと（弟）. ura: ututu:ja nu:ʃi: おまえの弟は何をしているの. *Note:* 上述の例文は、仕事、していることを尋ねるときに用いる。

w

wui *n.* おい（甥）. wa: wuinu umanan wui 私の甥がそこにいる. *Note:* [wuikwa]「甥っ子」。上記例文のような駄洒落を言うことができるかもしれない？

wutu *n.* おっと（夫）. antʃunu wutuja tarɨdʒatɨga あの人の夫は誰だ. wana: ʔagga wutudo: 私はあいつの夫だ.

wuːdʒuː *n.* そうそふ（曾祖父）.

ʔ

ʔkwa *n.* こ（子）. ankwa takka ʔkwa あの子は誰の子？.

ʔkwa *ptcl.* ～ちゃん. uʃin ʔkwa 子牛.

ʔkwa maga *n.* しそん（子孫）. ʔkwa maga nu un nja もう子供、孫がいるの？. Gojui nu maga ʔkwa na? （目の前の子を指して）呉唯（人名）の孫か？. Gojui maga na? （目の前の子を指して）呉唯（人名）の孫か？. *Note:* [maga-ʔkwa]とは滅多に用いず、こちらを用いる。目の前にいる場合[maga kwa]という。

ʔtʃan *n.* ちち（父）. wa: ttʃanja xɨ:samma xɨ:kijan 私の父は早く起きれない.

ʔtaʔkwa *n.* ふたご（双子）.

湯湾方言

【動作語彙】

a

aiçui *v.* あるく（歩く）. uːbutɨ atʃikoː その辺を歩いてきなさい. ura ja nuː ʃi ttʃina attʃittʃina お前はなにで来たの、歩いてきたの? kunuguru ja asa aitʃuntʃunu ɸussassuga この頃は朝歩く人が増えているよ.

akɨjui *v.* あける（開ける、空ける）. kun kwaʃija akɨtɨ ittʃaɲɲa この菓子は開けていいか. jaduː akɨtɨ ittʃaɲɲa 扉を開けていいか. umanan taruka suwajun munnatɨ akɨtɨkɨ そこに誰か座るから空けておけ. umanan taruka suwajun munnatɨ akɨtɨ utʃukɨ そこに誰か座るから空けておけ.

arajui *v.* あらう（洗う）. hɜːku tʃawan arawɨ 早く茶碗を洗え. kjuraːsamma arawɨjoː 綺麗に洗えよ. uraː areːkataja janakusa お前の洗い方は汚い. ura areːkataja janakusa お前の洗い方は汚い.

asɨbjui *v.* あそぶ（遊ぶ）. boruː/maruː ʃi asɨbjui ボール・毬で遊ぶ.

ç

çiŋgijui *v.* にげる（逃げる）. ama kara utuʃantʃu nu kjummun natɨ hɜːku çiŋgiroː あそこから怖い人が来ているから早く逃げよう. çiŋgitɨ bei unna 逃げてばかりいるな.

çuːkuʃi *n.* ひおこし（火おこし）.

h

haʃijui *v.* はしる（走る）. haʃittɨkoː 走って来い. haʃittɨiki 走って行け.

haʃiɜː *n.* かけっこ. warabɨŋkja no haʃiɜːdoː 子供なんかのかけっこだよ. haʃiɜː nu hajasa かけっこが速い.

hamarɨ *v.* がんばる、きばる（頑張る、気張る）. naːnaika hamarɨ もう少し頑張れ. inikaija kjuntɨ owaraʃunkara hamaroːja 稲刈りは今日で終わらせてしまうから頑張ろう. *Note:* hamarɨはkibaruでも良い。

hanaʃui *v.* はなす（離す）. warabɨnu turɜː ʒaga hɜːku hanasɨ 子供のケンカだから早く離せ. *Note:* hanaʃuiはhagaʃuiでも良い。

hagoːsa *a.* はがゆい（歯痒い）.

x

xɨkkɨːjui *v.* ひっかける. antʃunin muzɨ xɨkkɨːrattɨ あの人に水を引っ掛けられて.

xɨntoːʃui *v.* こたえる、へんとうする（答える、返答する）. ʔtʃunin nuːka kikjarɨppoː xɨntoːsuramba ikjandoː 人に何か聞かれたら返答しないといけないよ. ʔtʃunin nuːka kikjarɨttoː xɨntoːsuranto ikjandoː 人に何か聞かれたら返答しないといけないよ.

xɨːjui *v.* おきる（起きる）. hɜːku xɨːramba 早く起きなきゃ. niːnaga juːtouʒiː ja naː xɨːtɨkai 新永悠人おじいさんはもう起きたか.

xɨjagajui *v.* おきあがる（起き上がる）. *Note:* 完全に起きてシャキッとする感じ

ɸ

ɸukjui *v.* ふく（拭く）. tɨː aratan atuːja tʃanto ɸukɨjoː 手を洗った後は綺麗に拭けよ. tɨː aratan atuːja kjuraːsammaja ɸukɨjoː 手を洗った後は綺麗に拭けよ. tɨː aratan atuːja kjuraːsamma ɸukɨjoː 手を洗った後は綺麗に拭けよ.

ɸukjui *v.* ふく（吹く）. kazeno ɸukjui 風が吹いている.

ɸukkɨ *v.* ほどく. un matsuboːrɨtun çimoba ɸukkɨ その絡まった紐を解く. *Note:* ɸukkɨ はɸukkɨrɨでも良い。ɸukkɨjuiでは少し不自然。

j

jabujui *v.* やぶる（破る）, こわす（壊す）. noːtoŋkjaba jabujui ノートなどを破る. kuŋkabija jabunnajoː この紙は破らないで. hoːsunu jaburɨtɨ tsukaimun naran ホースが破れて使い物にならない. jaduːnu jaburɨtɨ noːsamboːikjan 扉が壊れて直さないといけない. jaduːnu jaburɨtɨ noːsamtoːikjan 扉が壊れて直さないといけない.

jaburaː *n.* やぶれもの（破れ者）, むほうもの（無法者）, あばれんぼう（暴れん坊）.

jamaːiki *n.* やまあるき（山歩き）. *Note:* ハイキングではなく、狩猟や採集などの目的を持って山に行くこと

janakusa *a.* きたない（汚い）. uraː areːkataja janakusa お前の洗い方は汚い. ura areːkataja janakusa お前の洗い方は汚い. jankusan tʃu 汚い人. janakusan kao 汚い顔. janakusan hagi 汚い足. janakusan tɨ 汚い手.

jaːtʃikurɨrɨ *v.* やってください, よこしてください. kun raʒioba wannin jaːtʃikurɨrɨ このラジオを私によこしてください.

jumjui *v.* よむ（読む）. homba jumjui 本を読む. wannin homba judɨkurɨrɨ 私に本を読んでください.

jugoːsa *a.* かゆい（痒い）.

k

katazɨkɨjui *v.* かたづける（片付ける）. uraga muʃitʃasseː katazɨkɨramba お前が持ってきた物を片付けなきゃ. *Note:* noːʃuiやmuduʃuiでも良い。

kijui *v.* きる（着る）. ɸukuba kijui 服を着ている. kimba kijui 着物を着ている.

kizamjui *v.* きざむ（刻む）. jassɜ: ba kizadɨko: 野菜を刻んでこい.

kikjui *v.* きく（聞く）. takka mɜ: kara kitʃi: 誰から聞いたの？.

kakjui *v.* かく（書く）. kunʒi:ja taruga katʃi: この字は誰が書いたの? kjura:samma kakattussɨga taruga katʃikai 綺麗に書けているけど、誰が書いたの? kjura:samma kakattui 綺麗に書けている.

kakko:ʃui *v.* かくす（隠す）. ura ja nu: ba kakko:ʃui お前は何を隠しているの. *Note:* kakuʃuiでも可

kɨ:jui *v.* かける. mɜ:tun ʔmattsɨ katʃi muzɨ kɨ:rɨ 燃えている火に水をかけろ. mɜ:tun ʔmattsɨ katʃi muzɨ kɨ:tɨ kjasɨ 燃えている火に水をかけて消せ.

kakurɨjui *v.* かくれる（隠れる）. da: nan kakurɨtutɨna どこに隠れていたの？.

kangɜ:jui *v.* かんがえる（考える）. tʃunukutu i: kangɜ:rɨjo: 人のことをよく考えろ.

kin *n.* きもの（着物）. jaburegin/jara:gin 破れ着物.

kibaru *v.* がんばる、きばる（頑張る、気張る）. ammai kibannajo: あんまり頑張るなよ. inikaija kjuntɨ owaraʃinatɨ kibaro:ja 稲刈りは今日で終わらせてしまうから頑張ろう. *Note:* kibaruはhamarɨでも良い。

m

mijui *v.* みる（見る）. kuru ba mirɨ これを見ろ.

miʃijui *v.* みせる（見せる）. kurɨba miʃiti kurɨrɨ これを見せてください.

muduʃui *v.* もどす（戻す）. uraja kiɲu katan kanɨba he:ku mudusɨ お前は昨日貸した金を早く返せ. du:guja mutu atanturo: nan/katʃi mudusɨ 道具は元あったところに戻せ.

mai *n.* しり（尻）. antʃunu mai ba u:tɨ あの人の後を追って. *Note:* mariでも可

mudujui *v.* かえる（帰る）, もどる（戻る）. uraja ɨttsɨ: mudutɨttʃi 君はいつ帰ってきたの. wanna kiɲu: mudutɨttʃa 私は昨日戻ってきた. wanna uttui mudutɨttʃa 私は一昨日戻ってきた.

muttʃui *v.* もっている（持っている）. ura ja tɨ: nan nu: mutʃui お前は手に何を持っているの. waŋ ga muttʃun uʃinu kwa: naʃido: 私が持っている牛が子を作ったよ. wan na kwa sannin muttʃuddo 私は子供を三人持っているよ.

mɜ:ʃui *v.* もやす（燃やす）. ʔmattsɨ mɜ:ʃui 火を燃やす. gum mɜ:ʃui ゴミを燃やす. kɨ: mɜ:ʃui ゴミを燃やす.

mɨtsɨkɨjui *v.* みつける（見つける）. tarunin mɨtsɨkɨratti: 誰に見つけられたの？. waŋga mɨtsɨkɨtatto: 私が見つけたよ。

n

nagɨjui *v.* なげる（投げる）, すてる（捨てる）. gumba nagɨtiko/sutɨtɨko ごみを捨ててこい.

nakja: *n.* なきむし（泣き虫）.

nakjui *v.* なく（泣く/鳴く）. tuinu natʃui 鳥が鳴いている. nakasatte 泣かされて.

no:ʃui *v.* なおす（直す）. he:ku no:ʃɨko: 早く直せ.

o

oːʃui *v.* おこる（怒る）. ankwaja ujanan oːsatte natʃui あの子は親から怒られて泣いている.

s

suwajui *v.* すわる（座る）. uma nan suwaturɨ そこに座ってなさい. waŋ ga kuː gadɨ suwatɨ mattʃurɨ 私がくるまで座って待ってろ. umanan taruka suwajun munnatɨ akɨtɨkɨ そこに誰か座るから空けておけ. umanan taruka suwajun munnatɨ akɨtɨutʃukɨ そこに誰か座るから空けておけ. umanan taruka suwajun kara そこに誰か座るから. suwaraʃun munnatɨ そこに誰か（絶対）座るから. suwaraʃimoːjun munnatɨ （絶対）おすわりになるから.

sɨdui *v.* すむ（住む）. uraja umanan ɨtsɨːkara sɨdui あなたはいつからそこに住んでいるの. uraja umanan ɨtsɨːkara sɨduŋŋa あなたはいつからそこに住んでいるの.

sɨdɨ *v.* すむ（済む）. benkjoːja sɨdɨna 勉強は済ませたの? hammɜːja sɨdɨtto ご飯は終わったよ. ʃukudaija sɨdɨna 宿題は済ませたの?

ʃ

ʃitʃui *v.* しっている（知っている）. wanna ʃitʃui 私は知っている. antʃuba ʃitʃunna あの人を知っている? wanna ʃijan 私は知らない. wanna ʃijandoː 私は知らないぞ.

t

tubjui *v.* とぶ（飛ぶ）. tui nu tudui 鳥が飛んでいる. tui nu tubjui 鳥が飛んでいる. tubjaː tubjaː aiçui 飛んで（スキップのように）歩く.

tumɨjui *v.* さがす（探す）. nennaʃam mun ja tumɨratɨ na 失くしたのものは探されたか.

tamɨʃui *v.* ためす（試す）. un doːguja tsukawarɨkkai tamɨsɨ この道具は使えるか試せ.

tutɨutʃukjui *v.* とっておく（取っておく）. kureː waː ataeːʒasuga tutɨutʃukɨjoː これは私の分け前だからとっておいておけよ.

tatʃui *v.* たつ（立つ）. uma nan tattʃurɨ そこに立ってなさい. tʃu nu mɜː nan tatsɨna 人の前に立つな.

turɜː *n.* けんか（喧嘩）. warabɨnu turɜː ʒaga hɜːku hanasɨ 子供の喧嘩だから早く離せ. warabɨnu turɜː ʒaga hɜːku hagasɨ 子供の喧嘩だから早く離せ.

u

ujui *v.* おう（追う）. antʃu nin uːwatti あの人に追いかけられて.

uitsɨkɨjui *v.* おいかける（追いかける）.

uʃipjaːʃui *v.* おしつぶす（押しつぶす）.

utʃui *v.* うつ（打つ）. utatte 打たれて.

w

waːjui *v.* わかる（分かる）. kun mondai waːjuntʃuja uranna この問題が分かる人はいないか. tarun waːrando: 誰も分からないよ. wanna waːjui 私は分かる. uraga itʃunkutuja waːran お前の言っていることは分からない. antʃunu itʃunkutuja waːran あの人の言っていることは分からない.

ʔ

ʔjui *v.* いう（言う）. waŋga ʔjun kutu kiki 私の言うことを聞け. antʃuni jatti あの人に言われて. uraga itʃunkutuja waːran お前の言っていることは分からない. nuːtʃiga itʃuru なんて言っている？. antʃunu itʃunkutuja waːran あの人の言っていることは分からない.

湯湾方言

【状態語彙】

a

asasa *adj.* あさい（浅い）. koːnu asasa 川が浅い.

atsɨsa *adj.* あつい（暑い）. wan na atsɨsa 私は暑い.

attʃa *adj.* あつい（厚い）. uraː saifunu attʃa お前の財布は厚い.

aːsai *a.* あかい（赤い）. kun ringo ja muru aːsai このリンゴはとても赤い.

ç

çijusa *adj.* ひろい（広い）. çijusan jaː 広い家.

çikusa *adj.* ひくい（低い）. mukaʃi ja wan na çikusaːta 昔は私は低かった.

x

xɨssa *adj.* おおきい（大きい）. jaː nu xɨssa ttoː tʃu nu naːnai hɜːjunmun 家が大きければ、人がたくさん入れるのに. *Note:* サイズが大きいことを表すのに使う *See:* **ɸuːsa**.

xɨgjurusa *adj.* さむい（寒い）. atʃaː ja xɨgjuruku najun aran naː 明日は多分寒くなるだろう.

ɸ

ɸukasa *adj.* ふかい（深い）. kunu umi ja ɸukasai この海は深い. nasake/kimu nu ɸukasa 情（気持ち）が深い.

ɸususa *adj.* ほそい（細い）.

ɸuːsa *adj.* おおい（多い）. ammai mutʃikoːna joː ɸuːsa sugjuttoː あんまり持ってくるなよ、多すぎるよ. *Note:* 量が多いことを指す cf. xɨssa

i

ikkjasa *adj.* みじかい（短い）. antʃu nu kuzɨ ja ikkjanaga あの人の靴はちぐはぐだ（lit. 短い長い）. *Note:* （量が）少ないという意味にもなる

iɲasa *adj.* ちいさい（小さい）. iɲasan keːki ja kantʃasoːnen 小さいケーキは食べたくない.

j

jassa *adj.* やすい（安い）.

judɜːsa *adj.* おそい（遅い）. muru judɜːsa とても遅い.

k

kjurasai *adj.* うつくしい（美しい）.

m

massa *adj.* おいしい（美味しい）. amakumantiː seː nudanmun dʒassɨga, ʃimanu seː ga itʃiban massai. あちこちでお酒を飲んだけど、島のお酒が一番おいしい.

miːʃan *adj.* あたらし（新しい）. miːʃan kudzɨ/miː kudzɨ 新しい靴. *Note:* [miːʃan] [miːʃai] [miːsan]という形がある

mutsɨkaʃa *adj.* むずかしい（難しい）. nan ga ʔjun kutu ja mutsɨkaʃa ja あなたが言うことは難しい.

n

nagasa *adj.* ながい（長い）. kamatʃin çigi nu nagasa/nagɜːsa 髪の毛が長い. *Note:* [nagasa]と[nageːsa]がどのような使い分けをされているかは不明

nigjasa *adj.* にがい（苦い）. muru nigjasai とてもにがい.

s

sɨbeːsa *adj.* せまい（狭い）. sɨbɜːsan jaː 狭い家.

t

taːsa *adj.* たかい（高い）. anu kɨːnu taːsa(ja) あの木は高い. *Note:* 値段に対しても使える

u

uroːʃa *adj.* ほんのちいさい（ほんの小さい）. naːnaikka uroːʃan amiː mutʃi koː もう少し小さい（目の）網を持って来なさい. *Note:* 髪の毛一本ほどに小さいもの

w

wassa *adj.* わるい（悪い）. wassan kutu sunna 悪いことをするな.

waːsa *adj.* わかい（若い）. an tʃoː waːsa あの人は若い.

2章

文法トピック別
対照言語学的論考集

湯湾方言及び池間方言の名詞述語文について

麻生 玲子

（東京外国語大学大学院）

1　北琉球奄美語湯湾方言

以下では、北琉球奄美語湯湾方言（以下、湯湾方言）の名詞述語文について概観する。はじめに基本構造を述べ、次に接辞などを担う形態素（コピュラ動詞）の形式の一覧を挙げる。湯湾方言に関するデータは、すべて講義中に直三男也先生から教えていただいたものである。

1.1　名詞述語文の基本構造

湯湾方言では、肯定かつ非過去の平叙文の環境では、単に名詞の並置で名詞述語文として機能する。以下に例文を挙げる[1]。

(1)　[kjuːmoːjusseː iŋgaujaŋkjadoː]

「今日いらっしゃるのは、男親たちだよ。」

ただし、述語末に [ʒa] という形態素が現れる例文も観察されている。

(2)　[arɨja mjaːʒa]

「あれは猫だ。」

「肯定かつ非過去の平叙文」以外の環境では、過去を表す接辞などを担うための形態素が述語末に必ず現れる。この場合、過去を表す接辞の形式は動詞と同じである。このため、当該形態素は動詞であると考えられる。ここではコピュラ動詞と呼ぶ。

(3)　[kinjuja ʔjunʃiru ʒata (tto)]

「昨日の夜は魚の汁だった（よ）。」

(4)　[ʔwanʃiruja arandoː]

「豚汁じゃないよ。」

[1] 例文末に表れる [doː]（あるいは [tto(ː)] は、終助詞に相当するものと分析する。その理由は、普通の動詞にも付加するからである。例：ʔwaŋkjoː urandoː「豚なんかいないよ。」

1.2 コピュラ動詞の形式

コピュラ動詞は、過去を表す以外にも様々な場面で用いられる。表 1 に、湯湾方言のコピュラ動詞の形式の一覧を挙げる。なお、コピュラ動詞は以下に例を挙げる通り、存在動詞とは形式が異なる。

(5) [tsukuenu kumanan ai]

「机がここにある。」

表中の「平叙」は、日本語で「～は、～だ／ではない。」、「疑問」は、日本語で「～は、～か？ ／ではないか？」、「接続」は、日本語で「～は～であり、／ではなく、」という意味を表す場合の形式である。疑問および接続の肯定欄に記載されている「–」は、名詞単独で機能する、あるいは名詞に疑問助詞等が直接付加できるという事を示す。N/A は該当なしを意味する。疑問助詞には [na] あるいは [kai]、接続助詞には [ʃi] が観察された。

表 1: 湯湾方言のコピュラ動詞の形式一覧

時制	平叙		疑問		接続	
	肯定	否定	肯定	否定	肯定	否定
非過去	–/[ʒa]	[aran]	–	[aran]	–	[arannen]
過去	[ʒata]	[aranta]	[ʒata]/[ʒatɨ]	[arantɨ][2]	N/A	N/A

以下にそれぞれの形式の例文を挙げる。コピュラ動詞が用いられない場合の例についても念のため例示する。

(6) [antʃuŋkjanu dəːdoː]

「あの人たちの竹だよ。」（平叙・肯定・非過去・コピュラ無）

(7) [antʃuja taroːʒa]

「あの人は太郎だ。」（平叙・肯定・非過去）

(8) [antʃuŋkjoː taroːtaːʒata]

「あの人たちは太郎たちだった。」（平叙・肯定・過去）

(9) [ʔwanʃiruja arandoː]

「豚汁じゃないよ。」（平叙・否定・非過去）

(10) [arɨja mjaː arantattoː]

「あれは猫じゃなかったよ。」（平叙・否定・過去）

(11) [urəː asɨnaː (hasɨtɨtsɨna)]

「それは汗か？（走ってきたのか？）」（疑問・肯定・非過去・コピュラ無）

(12) [tʃiː ʒatakai]

「血だったか？」（疑問・肯定・過去）

[2]現段階では [arantɨ] の例のみ見つかっているが、[ʒata]/[ʒatɨ] の例が疑問文で見つかっていることを考えると、[aranta] という形式も疑問文で見つかる可能性が高い。

(13)　[antʃuja ʃenʃei ʒatɨkai]

「あの人は先生だったか？」（疑問・肯定・過去）

(14)　[urja tʃiː aranna]

「それは血ではないのか？」（疑問・否定・非過去）

(15)　[tʃiː arantɨkai]

「血ではなかったか？」（疑問・否定・過去）

(16)　[kurja mɨntamaʃi (majugəːja aran)]

「これは目玉で、（眉毛ではない。）」（接続・肯定・非過去・コピュラ無）

(17)　[urija xɨgɨrɨja arannenʃi (gundaroːga)]

「これは垢ではなく、（ごみじゃないか。）」（接続・否定・非過去）

表 1 に挙げた形式に他の助詞等が付加し、上記以外の意味を表せることが想定される。例えば、以下のような理由を表すような例文が見つかっている。

(18)　[antʃuja naitʃɨgaoʒaga kjuranɨsəːʒajaː]

「あの人は内地顔で美しい青年だね。」

2　南琉球宮古語池間方言

以下では、南琉球宮古語池間方言（以下、池間方言）の名詞述語文について概観する。池間方言に関するデータは、講義中に仲間博之先生から得られたデータを基本とし、林 (2013) のデータを一部用いる。林 (2013) で/y/を用いて表記されているものに関しては、/j/に置き換え、統一した。

2.1　名詞述語文の基本構造

池間方言では、肯定かつ非過去の平叙文の環境では、単に名詞の並置で名詞述語文として機能する。このような環境でコピュラ動詞が現れることはないようだ。

(19)　[vva zumigimidun]

「君はいい女だ。」（平叙・肯定・非過去）

「肯定かつ非過去の平叙文」以外の環境では、過去を表す接辞などを担うための形態素が述語末に必ず現れる。当該形態素は動詞と同じ接辞を取ることから、動詞と考えられる。ここでは湯湾方言と同様にコピュラ動詞と呼ぶ。

(20)　kara=a sinsii=du a-tai

「あの人は先生だった。」（平叙・肯定・過去）[林 (2013:158)]

2.2 コピュラ動詞の形式

例文から得られた池間方言のコピュラ動詞の形式を表 2 に挙げる。コピュラ動詞の一部の形式 ai/atai は存在動詞と同じ形式である。入手できた例文からでは平叙・疑問・接続という 3 つの分類方法が有用かどうかわからなかったため、湯湾方言のような平叙・疑問・接続という分類はせず、時制と肯否の区別のみ行った。

表 2: 池間方言のコピュラ動詞の形式一覧

	肯定	否定
非過去	ai/jai/jara	aran
過去	atai	arada

以下にそれぞれの形式を用いた例文を挙げる。

(21) hai mmja jarabi ai-kjaa ira

「はい、子供の頃はね」（肯定・非過去 1）[林 (2013:202)]

(22) kara=a sinsii jaiba

「彼は先生なので、…」（肯定・非過去 2）[林 (2013:65)]

(23) hiicja jara-ban haasa jara-ban hii

「家族が多くても少なくても（作って）」（肯定・非過去 3）[林 (2013:205)]

(24) [bantʃaː çitu aran]

「私たちは他人ではない」（否定・非過去）

(25) kuma=kara=bakaai=ja ar-a-da

「ここからばかりではなくて…」（否定・過去）[林 (2013:111)]

参考文献

林由華 (2013) 「南琉球宮古語池間方言の文法」博士論文，京都大学.

ヴォイス現象についての比較*

九州大学大学院　人文科学府
占部　由子

0. はじめに

本章ではヴォイスについて、日本語共通語（以下、共通語）・北琉球奄美湯湾方言（以下、湯湾方言）・南琉球宮古池間方言（以下、池間方言）の比較を行う。

1. 使役

共通語において、能動文から使役文への派生には①使役接辞の挿入、②動作主の格標示が中心格（=ga）から周辺格（=ni）へ変更、③行為者の挿入という 3 つの操作が行われる。例として、「太郎が花子を殴った」を使役文にすると、以下のようになる。

(1)	[dʒiroːga	taroːni	hanakoo	naguraseta]
	dʒiroː=ga	taroː=ni	hanako=o	nagur-sase-ta
	次郎=NOM	太郎=DAT	花子=ACC	殴る-CAUS-PST
	次郎が太郎に花子を殴らせた			

日高（2002）によると、使役文は被使役者に付与する格標示によって、被使役者を対格で標示する場合（ヲ使役文）と与格で標示する場合（ニ使役文）に分けられるという。自動詞の場合、「被使役者をヲ格で表す場合には強制的な使役、ニ格で表す場合は許容・放任の使役」（日高 2002: 1）となる。他動詞の場合には二重ヲ格の制限により、被使役者がヲ格で表される。

湯湾方言においても、使役文の派生には共通語と同じ操作が行われる。つまり、①使役接辞の挿入、②動作主の格標示が中心格（=ga/nu）から周辺格へ変更、③行為者の挿入の 3 つの操作である。ただし、動作主の格標示は与格=n/nin 以外にも、向格=katʃi/ttʃi が用いられた。

(2)	[taroːttʃi	guʃamba	uraʃui]
	taroː=ttʃi	guʃan=ba	ur-aʃui
	太郎=ALL	杖=ACC	折る-CAUS-PST

* 本稿におけるデータのうち出典を明記していないものは、仲間博之先生（池間方言）と直三男也先生（湯湾方言）から、研修中に教えていただいたものである。この場を借りて、お二人には心からお礼を申し上げたい。

太郎に杖を折らせる

また、自動詞文において被使役者を与格で標示する場合も、対格で標示する場合も観察された。

(3) [taroː{ttʃi/nin} mitʃiba haʃiraʃui]
taroː={ttʃi/nin} mitʃi=ba haʃir-aʃui
太郎=ALL/DAT 道=ACC 走る-CAUS-PST
太郎に道を走らせる

(4) [taroːba haʃiraʃui]
taroː=ba haʃir-aʃui
太郎=ACC 走る-CAUS-PST
太郎を走らせる

この例では、日高（2002）の指摘通り、対格標示の場合は強制的な意味合いを持つという話者の内省が得られている。しかしながら早津（1999）は共通語において対格標示の場合と与格標示の場合の違いに、意味的な差というのは重要ではないことが述べられている。この点についての詳細な調査は行えていない。

なお、自動詞「死ぬ」を「死なせる」に派生することは難しく、「殺す」を使った表現に言い換えられていた。

(5) [ʔwaːba kɨsattɨ]
ʔwaː=ba kɨs-ar-tɨ
豚=ACC 殺す-PASS-MED
豚を殺されて

例は少ないが、湯湾方言において非対格自動詞の場合には使役文への派生が厳しいことが伺える。

一方、池間方言について今回の調査では使役文は観察されなかった。Hayashi（2010）によると池間方言の使役接辞は-ssas/-as, -sɨmi である。この方言においても①使役接辞の挿入、②動作主の格標示が中心格（=ga/nu）から周辺格へ変更、③行為者の挿入という操作が行われているようである。また、湯湾方言と同様に動作主の標示は与格(=n)と向格(=nkai)が使用される。

(6) zzaa kain ffau dumissasɨtai

zza=ja	kai=n	ffa=u	dumi-ssasi-tai
父=TOP	彼=DAT	子ども=ACC	殴る-CAUS-PST

父は彼に子どもを殴らせた

[Hayashi 2010: 182]

日高（2002）は、日本語の諸方言において使役の接辞は主に（サ）セルに由来するものが多いが、琉球語の中にはシムに由来するものが存在すると述べている。共通語の-sase、湯湾方言の-as、池間方言の-ssas/-as は（サ）セルに、池間方言の-simi はシムに由来するものだと考えられる。

2. 受身

共通語において能動文から受身文への派生は、①受身接辞の挿入、②被動作主が中心格へ変更、③動作主が周辺格へ変更という操作がなされている。使役文と同様に、「太郎が花子を殴った」を受身文に派生すると、以下のようになる。

(7)

hanakoga	tarooni	nagurareta
hanako=ga	taro=ni	nagur-rare-ta
花子=NOM	太郎=DAT	殴る-PASS-PST

花子が太郎に殴られた

さらに、以下のような受身文では項の増加が生じている。

(8) a.

hanakoga	tarooni	atamao	nagurareta
hanako=ga	taroo=ni	atama=o	nagur-rare-ta
花子=NOM	太郎=DAT	頭=ACC	殴る-PASS-PST

花子が太郎に頭を殴られた

b.

sentakumonoga	ameni	hurareta
sentakumono=ga	ame=ni	hur-rare-ta
洗濯物=NOM	雨=DAT	降る-PASS-PST

洗濯物が雨に降られた

このような受身文を「間接受動文」、（7）のような受身文を「直接受動文」という。

湯湾方言では、受身文においても共通語と同様の操作がなされていた。Niinaga(2010)によると、被動作主を主格=ga で標示するようだが、今回の調査ではもっぱらトピックマーカー（=ja）が使われた。

(9) [dʒiroːja taroːnin utatta]
dʒiroː=ja taroː=nin ut-ar-ta
太郎=TOP =DAT -PASS-PST
次郎は太郎に叩かれた

動作主の標示に与格(=n/nin)、向格(=katʃi/tʃi)が使われていた。しかし、=tʃi は許容されない例も存在した。なお、（10a）の例では=tʃi の代わりに=nin/n/katʃi を使用することができる。

(10) a. [taroːja amɨ*tʃi furatta]
taroː=ja amɨ=*tʃi fur-ar-ta
太郎=TOP 雨=ALL 降る-PASS-PST
太郎は雨に降られた

b. [taroːja dʒiroː{tʃi/katʃi} tsuburiba kurawasatta]
taroː=ja dʒiroː= {tʃi/katʃi} tsuburi=ba kurawas-ar-ta
太郎=TOP 次郎=ALL 頭=ACC 叩く-PASS-PST
太郎は次郎に頭を殴られた

=tʃi が使用できないことは間接受身文の特徴とも考えうるが、（10b）において=tʃi が許容されているため一概には言えない。この点についての考察は今後の課題である。なお、「折れる」を「折れられる」のように派生させることが難しいことが観察された。

(11) [tarukaga uiba uta]
taruka=ga ui=ba ur-ta
誰か=NOM 瓜=ACC 折った-PST
誰かが瓜を折った

受身文においても非対格自動詞を派生させることができないと考えられる。

池間方言も、共通語と同様の操作が観察された。また、この方言においても被動作主はトピックマーカー（=ja）を用いる例が多かった。

(12) [katoːja okun zumiku ttakaitai]
katoː=ja oku=n zumiku ttak-ai-tai
加藤（人名）=TOP 奥（人名）=DAT 見事に 叩く-PASS-PST
加藤は奥に見事にたたかれた

動作主の標示に与格(=n)と向格(=nkai)が使用された。どちらも同じように使用できるようであるが、（14）の場合には=n の方が自然だという。

(13)	[saba{n/?nkai}	ffa:	fa:injan]
	saba={n/?nkai}	ffa=ja	fa-ai-njan
	鮫=DAT/ALL	子ども=ja	食べる-PASS-PRFC
	鮫に子どもは食べられた		

3. その他の表現

「話し合う」「殴りあう」のような相互表現を湯湾方言で調査した。「話し合う」の場合には「談合し」に言い換えられるなど、相互表現は難しいことが伺えた。

(14)	[minnaʃi	dango:ʃiti	kimuro:]
	minna=ʃi	dango:-ʃi=ti	kimur-o:
	みんな=INST	談合-する=MED	決める-INT
	みんなで話し合って決めよう		

自発や逆使役といった現象もヴォイスとして取り上げられることがあるが、今回の調査では確認できなかった。

4. まとめと今後の課題

共通語・湯湾方言・池間方言の 3 言語を比較した結果、使役・受身文への派生手順が共通していることが分かった。また、それぞれの派生接辞も類似していることから、同じ語源であることが確認できた。しかし、使役の動作主／受身の被動作主の格標示が共通語では専ら与格（=ni）であるのに対し、池間方言・湯湾方言では与格に加え向格も使用できるという点で異なることが分かった。

今回の調査では、湯湾方言の使役文では動作主を対格で標示する場合と、与格で標示する場合があることが分かった。しかし、これらが「強制か許可か」という意味的に使い分けられているのか、別の要因によるものなのかはわかっていない。この点についてさらなる調査をし、池間方言についても同様のことが言えるか検証することが今後の課題として挙げられる。また、受身文については向格の使用が許容されない例が見られるため、この点についても詳しく調べていきたい。

グロス一覧

ACC : 対格　　DAT : 与格

CAUS : 使役　　INST : 具格

INT : 意志
MED : 中止形
NOM : 主格
PASS : 受身
PRS : 現在
PST : 過去
TOP : 主題

参照文献

Hayashi, Yuka (2010)　Ikema (Miyako Ryukyuan). In: Michinori Shimoji and Thomas Pellard (eds.) An introduction to Ryukyuan language, 168-188. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

早津恵美子 (1999) 「いわゆる「ヲ使役」「ニ使役」についての諸論考をめぐって」『語学研究所論集』4: 17-50.

日高水穂 (2002) 「ヴォイス」 大西拓一郎 (編) 『方言文法調査ガイドブック』
http://www2.ninjal.ac.jp/takoni/DGG/DGG_index.htm [2016 年 10 月アクセス].

Niinaga, Yuto (2010)　Yuwan（Amami Ryukyuan）. In: Michinori Shimoji and Thomas Pellard (eds.) An introduction to Ryukyuan language, 35-88. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

池間方言と湯湾方言の疑問の終助詞[1]

奥真裕
(東京外国語大学大学院)

1. はじめに

本稿は、池間方言と湯湾方言の疑問の終助詞の形態的、統語的ふるまい、またそれらの言語がどのように異なっているのかを記述する目的で執筆された。また、湯湾方言の言語の言語変化についても一考を投じている。構成としては 2 章で池間方言、3 章で湯湾方言の疑問の終助詞についてまとめ、4 章では両言語の疑問の終助詞についてまとめている。

2. 池間方言の疑問の終助詞

池間方言の疑問を表す形式として、今回の調査からは下記のような例が得られた。例(1)のように疑問の終助詞 na を用いるものと(2)のように終助詞を用いないものもある。

(1) faː-dʒan <u>na</u>
「食べないか？」

(2) innu hun-nu umussi-kai[2]?
「どの本が面白い？」

このほかにも、終助詞 ga も存在し、これを含めると全部で 3 通りの表され方がある。今回の調査では池間方言の疑問の終助詞に関して十分なデータが得られなかったため、以下は平澤(1985)を参考にしている。

2.1. 終助詞 ga

平澤(1985)は池間方言の係助詞の統語機能について論じているが、その中で係助詞[3]と終助詞の関係おいて考察し以下のようにまとめている。

i 疑問語疑問文には必ず用い、係助詞 ga と呼応して ga~ga 型の構文をつくる。

---

1 本稿は 2016 年 8 月に行われた琉球語言語研修において収集した宮古語池間方言と奄美語湯湾方言のデータに基づいて作成された。宮古語池間方言は仲間博之氏（宮古島市平良西原出身、1947 年生まれ、男性）、奄美語湯湾方言は直三男也氏（鹿児島県大島郡宇検村湯湾出身、1953 年生まれ、男性）の両氏にご協力を得た。この場を借りて感謝を述べたい。なお、誤りはすべて執筆者の責任である。

2 池間方言において kai は疑問文のマーカーとして用いられるわけではないため、ここでも先行研究と同様に動詞化のマーカーとして扱う。

3 池間方言には係助詞の ga という形態素もあるが、本稿で特に言及のない場合は終助詞の ga を示している。

ⅱ　格助詞 nu や準体助詞 nu などが直前に来る構文構造に限り、疑問語のない疑問文にもつかわれる。
ⅲ　単文中に du・’a があっても良い。’a~ga, du~ga, ga~’a~ga 型なども疑問文を作る。

ⅰとⅲは例(3)から、ⅱは例(4)からわかる。

(3)　’icï-ga cïguE-’ja zja’ukai ga[4]
「いつが都合は良いか」
(平澤: 1985; 246)

(4)　hu’iQc-ja ’iNnu ga
「大きな犬がか」
(平澤: 1985; 249)

2.2.　na

一方、na に関しても平澤(1985: 257)は以下のようにまとめている。

ⅰ　疑問語のない疑問文にのみ用いる。
ⅱ　格助詞 nu や準体助詞 nu の後には表れない。
ⅲ　単文中に du・’a があっても良い。du~na, ’a~na 型の疑問文をつくる。
ⅳ　係助詞 ga とは単文中で共起しない。

ⅰとⅲは例(5)から、ⅱは例(6)が非文であることからわかる。

(5)　funi-nu-du ’uriE’u’i-na
「船がいるのか」
(平澤: 1985; 249)

(6)　*hu’iQc-ja ’iN-nu-na
「大きな犬がか」
(平澤: 1985; 249)

2.3.　池間方言の疑問の終助詞のまとめ

以上からもわかるように、池間方言では疑問の終助詞の直前に準体助詞または疑問語のある疑問文では ga、疑問語のない疑問文では na が用いられる。実際に例文(3)や(4)の ga を

[4] 例文の転写と訳は平澤(1985)から引用している例文に関しては、そのまま採用している。

na に置き換えることができないこと、また例文(5)の na を ga に置き換えられないことも平澤(1985)は言及している。ga や na のない形に関しては平澤(1985)では述べられていないが、2 章の冒頭部分でも例(2)で示しているように今回の調査では数例見つかった。係助詞との共起に関しては、林(2013)で du が焦点助詞であると述べられていることからもわかるように、疑問に関しても重要な点と思われるが、データも十分でないことからここでは取りあげない。

3. 湯湾方言の疑問の終助詞

湯湾方言の疑問の終助詞には na と nja、kai と言う形式がある。以下は今回の調査から得た例文である。それぞれ (7)は na、(8)は nja、(9)は kai の例である。

(7) un gohan-ba utʃu-tɨ na
「そのご飯を残したのか」

(8) naa ttʃu-n nja
「もう来ているか」

(9) an tʃu-ja ʃenʃei-dʒa-tɨ kai
「あの人は先生だったか」

3.1. na と nja

na の前に来ることができる要素としては例(10)のように名詞、(11)のように形容詞、(12)のように過去や動作の結果を表す-tɨ、(13)のように非過去の否定形-an、そして(14)のような連体形-n が現れた。

(10) an tʃu-ja ʃenʃei na
「あの人は先生か」

(11) ka-dɨ jitʃʃan na
「食べていいか」

(12) taru-ga mɨzɨ-ja kootɨ na[5]
「誰が水を買ったか」

[5] この文では-na はなくともよい。

(13) ura-ja kane-ja mutʃʃur-an na
「おまえは金は持っていないか」

(14) mɨzɨ koː-ju-n na
「水を買うか」

一方、nja が用いられるのは前の要素が連体形のときのみである。実際に例 (15)では-na も-nja もどちらも用いることができる。(14)を参照。

(15) mɨzɨ koː-ju-n nja
「水買うか」

(16) cf.　mise-kara koː-ju-n　mɨzɨ
「店から買う水」

(17) taru-ga mɨzɨ-ja koː-ta-n　nja
「誰が水を買ったか」

(18) cf.　mise-karakoː-ta-n mɨzɨ
「店から買った水」

ここで先行研究を見てみると、Niinaga (2014)では na と nja は、同化による音の変化によるもので、同一の形態素として認めている。以下は Niinaga (2014:495)からの引用である。

a. Assimilation occurs
wakar-jur-i (understand-UMRK-NPST) + *na* (PLQ) > /waka-ju-n=nja/ (*/waka-ju-i=na/)
b. Assimilation does not occur
wakar-an (understand-NEG) + *na* (PLQ) > /wakar-an=na/ (*/wakar-an=nja/)

実際に今回の調査結果から見ても、連体形以外では na と nja の現れ方は相補分布をなしていることがわかるが、例(14)のように連用形のあとに na が用いられている例が見受けられた。これは比較的若い世代[6]で na を疑問の終助詞として一般化し、全体に使えると類推したものと考えられる。さらには、(17)のように本来的には-ta とは一緒に用いなかった nja(na)を、連体形の n から類推して nja を使用していると考えられる。

[6] Niinaga(2014)の主な調査協力者が 1923 年生まれなのに対し、今回の協力者は 1953 年生まれである。

また、Niinaga(2014: 459)の記述によると、na/nja は疑問語疑問文と共起することができないと指摘されているが、例(12)や(17)からも分かるように、今回の調査結果では na/nja も真偽疑問文だけでなく、疑問語疑問文にも使用されている。

3.2. kai

kai に関しては今回の調査からは十分な情報は集められなかった。そして、先行研究にも記述されているように、下記の例も「疑い」のモダリティとして機能しているようにも見受けられる。(kai は na と置き換え可能、(13)を参照)

(19) ura-ja kane-ja muttʃur-an kai
「おまえは金はもってないか」

(20) taru-ga mizɨ-ja koː-te-nen kai
「誰が水は買ってないか」

3.3. 湯湾方言の疑問の終助詞のまとめ

na/nja に関しては Niinaga(2014)の説明するよう同化現象による同一形態素の異形態と考えるべきであろう。そして、今回の協力者の言語では na や nja が話者の類推により使用される範囲を広くしていると仮定することができる。また、従来は真偽疑問文のみに用いられていた na/nja の使用域が広がり、疑問語疑問文にも用いられていることを示した。

4. おわりに

以上の結果を表にまとめると、表 1、表 2 のようになる。

湯湾方言において比較的若い世代において 1) 従来は na が finite verb、nja が連体形の後に用いられていたものが、今回の調査では na/nja が連体形、finite verb の両方で使用されること、2) na/nja が真偽疑問文だけではなく疑問語疑問文にももちいられることがわかった。

また、池間方言の疑問の終助詞に関しては、今回十分なデータが得られなかった。

表 1：先行研究より

	池間方言　平澤(1985)より		湯湾方言　Niinaga(2014)より		
	ga	na	kai	na	nja
finite verb	＋	＋	＋	＋	－
non-finite verb（連体形）	－	－	－	－	＋
疑問語疑問文	＋	－	＋	－	－
真偽疑問文	－	＋	＋	＋	＋

表 2：今回の調査より

	池間方言		湯湾方言		
	ga	na	kai	na	nja
finite verb	データなし	＋	＋	＋	＋
non-finite verb（連体形）	データなし	データなし	－	＋	＋
疑問語疑問文	データなし	データなし	＋	＋	＋
真偽疑問文	データなし	＋	＋	＋	＋

池間方言と湯湾方言の疑問の終助詞のデータを見て考えられる仮説としては、池間方言で現在でも先行研究のようにその前の文が疑問詞疑問文か真偽疑問文かどうかを区別するマーカーとして機能しているとするならば、池間方言に比べて湯湾方言ではその機能は弱まりつつあり、kai がモダリティとして新たな役割を担いつつあるのではないかと仮定し、本稿の結びとする。

5. 今後の課題

池間方言においてはこのテーマについて調査をする機会が得られず、先行研究を引用するにとどまった。また、湯湾方言においても、話者の類推で na/nja の使用域が広がっていること、また kai がモダリティの意味を担いつつあることを提言したが、今回の調査では協力者 1 名のみで、その言語全体が変化しつつあるのかどうかについては議論できていない。更なる調査を行い、分析する必要がある。

先行研究

Niinaga, Yuto (2014) A grammar of Yuwan, a northern Ryukyuan language. Tokyo: University of Tokyo dissertation.

林由華(2013)「南琉球宮古語池間方言の文法」京都大学博士論文

平澤洋一(1985)「池間方言係助詞の統語機能」、『沖縄文化研究』11, 245-261

琉球語池間方言、湯湾方言及び日本語共通語における格体系と主要項に関する記述と比較

加藤幹治 *

1　はじめに

本論で扱う言語は、沖縄県宮古島市の池間島で話される池間方言、鹿児島県奄美大島宇検村の湯湾集落で話される湯湾方言、ならびに日本語共通語である。それぞれの言語における主要項 (主格、対格) の形式や統語的特徴および格配列の記述を行うこと、また言語間における差異を分析することが本論の目的である。本論の構成は以下の通りである。§2 では池間方言について、§3 では湯湾方言について、§4 では三言語の比較を行う。

2　池間方言

2.1　池間方言の格配列

池間方言は、自動詞主語と他動詞主語を=*ga*/=*nu* で、他動詞目的語を=*ju* で標示する主格対格型言語である。動詞の意志性などに影響される活格型の格配列は観察されない (see Iwasaki 2015)。

2.2　主格

池間方言では、主格を表す形式に=*ga* と=*nu* の二通りが存在する (1)。

(1)　a. [ʃiːʃiː**ga** tauitai][1]
　　先生が倒れた
　　b. [nuːma**nu** suvviːui]
　　馬がはしっている

2.2.1　池間方言における Differential Subject Marking

池間方言の名詞句は、=*ga* と=*nu* が後続できるか否かという観点から以下の 3 つのグループに分けられる。(1) =*ga* のみが接続可能で、=*nu* は許容されないグループ。人称代名詞がこのグループに該当する。 (2) =*ga* と=*nu* がどちらも接続可能なグループ。疑問代名詞 *taru* (「誰」に相当), 数詞, 呼称可能な人間名詞, 敬称の付かない固有名詞がこのグループに該当する。(3) =*nu* のみが許容され、=*ga* は許容されないグループ。敬称のつく固有名詞、呼称不可能な人間名詞、疑問代名詞 *nau* (「何」に相当), 非情物がこのグループに該当する。

Iwasaki (2015) は、Croft (2003) の提唱した extended animacy hierarchy をベースに、池間方言における DSM の要因を、指示性、有生性、呼称可能性、侮蔑性 (derogatory) の 4 つに分析している (表 1)。

表 1　池間方言における DSM (Iwasaki (2015) より作成)

指示性:	GA (代名詞, 固有名詞)	<< GA/NU (一般名詞)
有生性:	GA/NU (人間、有情物)	<< NU (非情物)
呼称可能性:	GA (呼称可能)	<< NU (呼称不可)
侮蔑性 (複数接辞) :	GA/NU (-*ta* を伴い非侮蔑的)	<< NU (-*mmi* を伴い侮蔑的)

Iwasaki (2015) が挙げる DSM の要因に対して 2 点反例を示す。

一点目に、Iwasaki (2015) は、人間の固有名詞は常に=*ga* で標示を受けるとしているが、発表者は (2) のような結果を得た。

* 九州大学文学部

[1] 本来は形態素ごとにグロスを付すべきであろうが、形態素分析ができていない (特に動詞) ため和訳のみを付す。

(2) a. [taro:**ga/nu** suvvaçi:ui]
太郎が走っている
b. [urabesan**nu/*ga** suvvaçi:ui]
占部さんが走っている

(2) では、敬称のつかない人間の固有名詞に対して両方の標示が、敬称のつく人間の固有名詞に対して=*nu* のみの標示が許容されている。このような現象を説明する方法として、本論では尊卑に関する有標/無標の概念を導入する。尊卑に関して無標の固有名詞であれば=*ga* または=*nu* で標示し、-*san* のような尊卑に関わる形態素が附されている固有名詞であれば=*nu* のみで標示されると考えればよい。

また、尊卑に関わる有標性の概念を導入することによって、Iwasaki (2015) が DSM の要因のひとつとして挙げる侮蔑性も同時に説明できる。ここでは-*ta* の持つ意味的特徴を [+pl] と考え、-*mmi* を [-hon, +pl] と考える。そうすれば、複数接辞に関係する DSM も敬称接辞と同様の要因で説明できる。

尊/卑や遠/近などではなく、尊卑の有標性で説明を行うのは、-*san* ([+hon]) と-*mmi* ([-hon]) が同様の標示を受けるためである。[+hon] vs. [-hon] の対立ではなく、[+hon], [-hon] vs. 無標の対立でなければこの現象をうまく説明できない。

二点目に、Iwasaki (2015) は、(3) で疑問代名詞 *taru* に対して=*ga* のみが許容されることを根拠に、疑問代名詞を含む全ての代名詞が最上位の階層におかれることを主張している。

(3) *taru-**ga/*nu** du masɨ ga i*
who-NOM F good Q PP
'Who is good, I wonder?'

(Iwasaki 2015:771)

一方で、発表者の調査では、疑問代名詞 *taru* に対しては=*ga* と=*nu* の両方が許容された (4)。

(4) [taru**ga/nu** nnaga:nna suɕa]
この中で誰が一番年上か

(3) には焦点マーカーの du と疑問の終助詞の=*ga* がある。(3) ではこの二つの要因の影響によって=*ga* が好まれたという可能性を排除できず、*taru* がどの標示を受けるかを見るためのデータとしては (3) は不適当である。よって、本稿では (4) から、*taru* は=*ga* と=*nu* 両方の標示を受けられると考える。この結果は、代名詞の中でも疑問代名詞は指示性が低いことを示唆している。

Iwasaki (2015) における DSM の要因を踏襲し、以上の二点を踏まえた上で池間方言の DSM の要因を記述すれば以下のようになる。

表 2　池間方言における DSM の要因 (改訂版)

指示性:	GA (人称代名詞)	<< GA/NU (疑問代名詞、一般名詞)
有生性:	GA/NU (人間、有情物)	<< NU (非情物)
呼称可能性:	GA (呼称可能)	<< NU (呼称不可)
尊卑の有標性 :	GA/NU (無標)	<< NU (有標)

2.3　対格

池間方言では、対格を=*ju* で標示する。

(5) [tuinu sɨ:**ju** dzuffu]
鳥が巣を作る

接続する名詞句の最後の音素によって音韻変化を生ずるが、基底形を/ju/と考え、以下に形態音韻規則を列挙する。

1. ju → nu / n__
   (6) [kaiga hun**nu** jun]
   彼が本を読む
2. ju → Cju / C (other than /n/)__
   (7) [tud**ʤu** takasaːsu][2]
   妻を大切にする
3. ju → u / CV__
   (8) [mmaga ffankai munu**u** fiːtai]
   母が子供に物を食べさせた

3 湯湾方言

3.1 湯湾方言の格配列

湯湾方言は、自動詞主語と他動詞主語を*=ga*/*=nu* で、他動詞目的語を*=ba* で標示する主格対格型言語である。動詞の意志性等による能格型の格配列は観察されない。

3.2 主格

湯湾方言では、主格を*=ga* と*=nu* で標示する (9)。

(9) a. [naːkja**ga** ʃitaboːrɨ]
   あなた方がやってください
   b. [tui**nu** natʃui]
   鳥が鳴いている

3.2.1 湯湾方言における DSM

=ga と*=nu* の選択には、前接する名詞句の種類が関与する。どの名詞句に対してどちらの形式が用いられるかは表 3 に示す通りである。黒い部分はその種の名詞句が当該形式の後続を許容することを、白い部分は許容しないことを示す。灰色部は話者の内省の揺れが大きいことを示している。

表 3 湯湾方言の主格標示

この結果を、extended animacy hierarchy を用いて分析すると表 4 のようになる。

表 4 湯湾方言における DSM

指示性：	GA (人称・疑問代名詞)	<< GA/?NU (固有名詞)	<< GA/NU (再帰代名詞・数詞)
有生性：	GA/NU (人)	<< NU (動物・無生物)	
呼称可能性	GA/?NU (呼称可能)	<< ?GA/NU (呼称不可)	

[2] /tuz/「妻」は単独で発話された場合 [tuzɨ] として実現するが、なんらかの音韻規則によって語末に [ɨ] が付加されると考える。/tuz/+/ju/が音韻規則によって /tuzzju/となり、それが [tudʤu] として実現していると考えている。

3.3　対格

湯湾方言では、対格を=*ba* で標示する (10a)。目的語が標示を受けないこともある (10b)。

(10)　a. [sɜː**ba** wantamɜ koːtikoː]
　　酒を私のために買ってきて
　　b. [urakatʃi kuri kurijui]
　　お前にこれあげる

3.3.1　湯湾方言における Differential Object Marking

本節では、通言語的に DOM に関与する要素として挙げられる (下地 2016) 隣接性、有生性、特定性について見ていく。

湯湾方言における DOM の要因として、第一に隣接性が関与していると考えられる。表 5 は、目的語がある例文 (計 169) の中で、標示があるかないか、目的語と動詞が隣接しているかどうかをまとめたものである。

表 5　DOM と隣接性

	ba	なし	計
隣接	89	63	152
非隣接	17	0	17
計	106	63	169

表 5 を見ると、目的語と動詞が隣接しない 18 例のうち、対格を標示しないものは存在しない。つまり、動詞と目的語が隣接しない場合、どの項が対格かを明確に標示しなければならない。このことから、湯湾方言における対格標示の目的は、目的語がどの項かが判断しづらい場合に目的語を明確にすることであると考えられる。

第二に、主語と目的語の有生性の相対的関係を考えたい。表 6 は、主語と目的語の関係及び標示をまとめたものである。「順行」は主語の方が目的語より有生性の階層が高いことを表す。この組み合わせが最もよく見られるパターンである。「等位」は主語と目的語の階層が同じ組み合わせであり、「逆行」は目的語の方が階層上位である組み合わせである。

表 6　DOM と相対的有生性

	ba	なし	計
順行	87	63	150
等位	5	0	5
逆行	8	0	8
計	100	63	163

表を見ると、目的語の相対的階層が低くなるにつれ=*ba* の標示を受けやすくなることがわかる。これは、通例目的語になりづらい階層上位の名詞句が目的語であることを明示する機能を持つと考えられる。圧倒的多数である順行を無標、少数である等位と逆行を有標と考えると、有標の分布に対して特別な標示を行うこととなり、合理的である。

第三に、目的語の特定性について考えたい。表 7 は名詞句の特定性と対格の標示をまとめたものである。表を見ると、特定性のある名詞句において無標示である例が極めて少ないことが分かる。このことから、=*ba* の機能は、目的語が特定である時にそのことを明示することであると考えられる。

表 7　DOM と特定性

	ba	なし	計
不特定	57	54	111
特定	49	9	58
計	106	63	169

また、目的語と判断できる名詞句と動詞の特定の組み合わせで無助詞がよく観察されることがある。例えば、[hammɜː kamjui]「ご飯を食べる」や [nuː ʃui]「何をしている？」などはほぼ全て無助詞である。名詞句と動詞のある特定の組み合わせにおいて、名詞句が動詞の項として取られているのではなく、一つの述部として解釈されている可能性がある。

4　三言語の比較

4.1　主格標示

共通語では、主節における主格の標示はガによって行われるか、あるいは無助詞である。池間方言と湯湾方言では主節でも=*ga* と=*nu* の二つの格助詞による標示が観察された。これら二つの言語は、共通語に比べ無助詞である頻度が極めて少なかった。湯湾と池間では DSM に関与する要素の数が異なり、池間では尊卑の有標性という要素も重要視されることがわかった。

4.2　対格標示

共通語では、対格は基本的にヲによって行われるか、あるいは無助詞である。池間方言では u とその異形態によって標示され、無助詞は観察されなかった。湯湾方言では=*ba* によって標示されるか、あるいは無助詞であった。湯湾における DOM では隣接性、有生性、特定性が関与的であることが分かった。

4.3　格標示の義務性

以上をまとめると、表 8 のようになる。

表 8　三言語における格標示

	共通語	湯湾	池間
主格	ga/無	ga/nu	ga/nu
対格	o/無	ba/無	u

他動詞文で主語と目的語が現れている場合、それぞれの言語において必須である格標示の数は、共通語において 0、湯湾方言において 1、池間方言において 2 である。各項の役割を判別する機能という観点から見ると、池間方言は格標示以外の手段 (語順、相対的有生性など) に頼ることなく判別ができる。一方で、共通語や湯湾方言では、格標示に頼らずに各項の役割を判別することができる。

遠藤 (2012) は、対格の機能が区別的機能 (discriminatory function) である「弱い対格」と目的語の表示そのものが機能である「強い対格」という二つの類型論タイプを設定している。これに従えば、共通語と湯湾方言は「弱い対格」に、池間方言は「強い対格」に分類される。

4.4　仮説

池間方言では格標示のみで各項の関係が判別でき、湯湾方言と共通語ではそうでない度合いが高いということを観察した。このことから、以下のような仮説を立てる。湯湾方言と共通語 (弱い対格タイプ) は、池間方言 (強い対格タイプ) に比べて、各項の役割の判別をするための格標示の手段が発達しているのではないかという仮説である。例えば、共通語では「雲が太陽を隠した」というのは少し不自然で、「太陽が雲で隠れた」というのが自然に感ぜられる。この現象の理由として、格標示に頼ること無く項を判別するために、典型的動作主でない無生物はそもそも他動詞文の主語にしないという動機が考えられる。典型的でない他動詞文の出現を制限することによって、テキストに現れる項を典型的他動詞文の項として判断しやすくなるのである。つまり、ここでいう仮説は、「湯湾方言と共通語では典型的な他動詞文を選好し、池間方言ではその傾向が薄れる」と言い換えられる。この仮説を検証するためには、コーパスや自然談話等を用いてどのような文タイプが現れやすいかを頻度の観点から分析する必要があるだろう。

参考文献

Croft, William (2003) *Typology and universals*. Cambridge: Cambridge University Press.

遠藤史 (2012)「強い対格と弱い対格 : 対格の類型論のための試論」『経済理論』366: 1-21.

Iwasaki, Shoichi (2015) Animacy and differential subject marking in the Ikema dialect of Miyako, *Studies in Language* 39(3): 754-778.

下地理則 (2016)「格体系記述の中間報告」下地理則・小川晋史・新永悠人・平塚雄亮・坂井美日（編）『尾前調査班中間報告書-宮崎県椎葉村尾前方言 簡易語彙集と文法概説-』国立国語研究所.

北琉球奄美語湯湾方言と南琉球宮古語池間方言の形容詞*

黒島規史（東京外国語大学／日本学術振興会特別研究員）

1　はじめに

本発表では，北琉球奄美語湯湾方言（以下，湯湾方言）と南琉球宮古語池間方言（以下，池間方言）の形容詞について，両言語を共通日本語とも比較しながら記述し，整理することを目的とする．

琉球諸語の形容詞の活用には，「サアリ活用」と「クアリ活用」の二つの系統がある (名嘉真 1986: 46). ここで対象とする湯湾方言と池間方言もそれぞれサアリ活用とクアリ活用のタイプに属する．

そもそも，共通日本語において形容動詞を典型的な形容詞とともに一つの品詞として認めるかについて議論があるように，両言語の記述においても形容詞という品詞を立てるかということ自体が問題になる．本発表では下地 (2010) を参考にし，両言語の語根形のみを形容詞と見る立場を取る．

以下，§2 では形態的な面から，§3 では機能的な面から湯湾方言と池間方言の形容詞についてまとめる．§4 では形容詞と動詞，§5 では形容詞と名詞はどのように異なり，またどのような共通点を持っているのかについて述べる．§4 と §5 は両言語の形容詞をどのように扱うのかにも関わる．§6 はまとめと残された問題である．

2　形態から見た湯湾方言と池間方言の形容詞

まず，湯湾方言と池間方言の形容詞について，それぞれ形態の面から見ることにする．以下に見るように共通日本語では形容詞語根の連体修飾は「古本」「うれし涙」など一部に限られるが，湯湾方言においては形容詞の語根形でも連体修飾が可能であり，池間方言においては語根形により連体修飾が普通である．

2.1　形態から見た湯湾方言の形容詞

湯湾方言の形容詞は基本的には名詞化辞 -sa が付いた形で用いられ (1)，-sa のない語根形は連体修飾のみに用いられる (2)．連体修飾は主に動詞化辞 -sar（-sa + ar-「ある」）に -n の付いた連体形が担う (3)．次節で詳しく見るが，-sa 形は終止形として叙述の機能を持つ他，場合によっては連体修飾や連用修飾としての機能も果たす．

(1)	kun	hon=ja aː-**sa**	(2)	aː	hon	(3) aː-**sa**-n　hon
	この	本=TOP 赤い-NMLZ		赤い（語根形）	本	赤い-VBLZ-ADN 本
	「この本は赤い」			「赤い本」		「赤い本」

-sa 形には他に mutsikaʃa「難しい」，attʃa「厚い」のように語末の音が異なるものも含まれる．

---

* この発表は内容は，2016 年 8 月 16 日から 29 日まで東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所にて行われた，琉球語言語研修の一環で調査したデータに基づいている．北琉球奄美語湯湾方言のインフォーマントは直三男也さん（1953 年生まれ，奄美大島宇検村湯湾出身），南琉球宮古語池間方言は仲間博之さん（1947 年生まれ，宮古島市平良西原出身）である．なお，講師の下地理則先生，新永悠人先生には研修中，また 2016 年 9 月 21 日に行われた琉球語言語研修フォローアップミーティングにおいて多大な指導を賜った．しかし，言うまでもなく本稿におけるいかなる誤りも筆者の責任である．

2.2　形態から見た池間方言の形容詞

池間方言の形容詞は主に次の三つの形態を区別しておく．池間方言も湯湾方言と同様，形容詞語根は連体修飾の機能しか担わない (4)．活用に関わる形には -kai 形 (5) と連用修飾の機能を担う -fu 形 (6) がある．形容詞には muzukasɨ「難しい」，utunasɨ「大人しい」等，シク活用の語尾に対応するような -sɨ がある．また，hinna「変な」は「-な」の部分まで含めて一語として振る舞う (e.g. hinna-f=fa njaːn hitu (変な-ADVLZ=TOP ない.ADN 人)「変ではない人」)．

(4)　taka bitu
　　高い 人
　　「高い人」

(5)　taka-**kai**-ba
　　高い-VBLZ-COND
　　「高いので」

(6)　taka-**fu**　nuːi
　　高い-ADVLZ 登る
　　「高く登る」

(4) のような複合形には他に，形容詞的に振る舞い，名詞と形容詞の中間的な位置にある taka dai（高い + 値）「高い値」がある．このタイプには hu-gui（大きい + 声）「うるさい」も含まれるだろうが，hu- は林 (2013: 83) では接頭辞とされている．さらには形式名詞の munu（もの）を伴い，場合により「もの」的意味を失い，叙述の機能を果たすこともある atsɨ munu「暑い（もの）」のようなタイプがある．その他，tsɨmu kagi（心 + 美しい）「心の美しい」のような名詞 + 形容詞タイプも確認できた．

3　機能から見た湯湾方言と池間方言の形容詞

次に，湯湾方言と池間方言の形容詞を，形容詞の主要な機能である叙述と連体修飾から見ていく．共通日本語のイ形容詞の場合，基本形が叙述と連体修飾を担うが，両言語の叙述と連体修飾の機能は，だいたいにおいてそれぞれ別の形が担っていると言える．

3.1　機能から見た湯湾方言

叙述と連体修飾の機能から湯湾方言の形容詞を整理すると，次の表 1 のようになる．

表 1　機能から見た湯湾方言の形容詞

	叙述	修飾
語根形	-	+
連体形	-	+
-sa 形	+	±
-sai 形	+	-

語根形はすでに述べた通り，連体修飾の機能を持つのみである．連体形は連体修飾の他，引用節を形成する際にも現れる (7)．

(7)　an　ˀtʃu=du waru-sa-n-ˀtʃi　umuj-ui
　　あの 人=FOC 悪い-VBLZ-ADN-QUOT 思う-NPST
　　「あの人こそ悪いと思う」

-sa 形はそのまま叙述の機能を持ち (8)，=doː（〜よ）や =jaː（〜なあ）のような終助詞が付くこともある (9)．

(8) an ʔtʃu=nu hɨ-ssa
あの 人=NOM 大きい-NMLZ
「あの人が大きい」

(9) kjuː=ja tʃu=nu ikkja-sa=**jaː**
今日=TOP 人=NOM 少ない-NMLZ=SFP
「今日は人が少ないなあ」

-sa 形のもう一つの機能として連体修飾があるが，-sa 形のみで連体修飾しても自然な場合と (10)，連体形にしなければ不自然な場合があるようである (11).

(10) a. sɨbəː-sa-n jaː
狭い-VBLZ-ADN 家

b. sɨbəː-sa jaː
狭い-NMLZ 家
「狭い家」

(11) a. inja-sa-n ʔtʃu
小さい-VBLZ-ADN 人

b. ?? inja-sa ʔtʃu
小さい-NMLZ 人
「小さい人」

また，-sa 形はそのまま連用修飾の機能を果たすこともある (12).

(12) nagəː-sa mattʃui
長い-NMLZ 待つ.PROG
「長いこと待っている」

最後に，-sai 形について述べる．-sai 形は -sa 形 + -ar（ある）+ -i（非過去）と分析できる (Niinaga 2014: 410)．エリシテーションの結果，ほとんどの場合 -sa 形と -sai 形はどちらも叙述が可能との回答を得たが，次のように muru（とても）という副詞と共起するときには -sai 形の方がより自然だと言う (13).

(13) kun ringo=ja muru aː-sa-i
この リンゴ=TOP とても 赤い-VBLZ-NPST
「このリンゴはとても赤い」

焦点を表す =du と -sai 形が共起した例もあったが，この例についても -sa 形を用いることはできると言う (14).

(14) an ʔtʃu=du waru-sa-i
あの 人=FOC 悪い-VBLZ-NPST
「あの人こそ悪い」

次の例をエリシテーションで聞いたときには，それぞれ (15) は -sai 形，(16) は -sa 形で用例を得た．しかし，確認すると両例とも -sa 形でも -sai 形でも可能とのことである．確かなことはわからないが，上の例とも考え合わせると，-sai 形は肯定形において話者の主観的な評価を表すと言えるかもしれない.

(15) an ʔtʃu=nu waru-sa-i
あの 人=NOM 悪い-VBLZ-NPST
「あの人が悪い」

(16) tinki=nu waru-sa
天気=NOM 悪い-NMLZ
「天気が悪い」

3.2 機能から見た池間方言

叙述と連体修飾の機能から湯湾方言の形容詞を整理すると，次の表 2 のようになる.

表 2　機能から見た池間方言の形容詞

	叙述	修飾
語根形	-	+
名詞的複合形	+	-
形容詞的複合形	+	+
-kai 形	+	+

複合形の中でも taka dai「高い値」は，taka dai munu (高い + 値 + もの)「高い値のもの」のように連体修飾としての機能を持つため，表 2 にあるように形容詞的複合形と呼び，連体修飾の機能を持たない名詞的複合形と区別する．

池間方言の形容詞は語根形では連体修飾の機能しか持たないため，「あの木は高い」と言うときは「あの木は高い木だ」のように複合形で言わなければならない (17).

(17)　unu　kiː=ja　taka　giː
　　この 木=TOP 高い 木
　　「あの木は高い（木だ）」

あるいは，すでに述べたように，場合によっては形式名詞の munu との名詞的複合形も「もの」という指示機能を失い，単に叙述の機能を果たす場合がある．エリシテーションのデータを見る限り munu の形で叙述する場合は，atsɨ munu「暑い（もの）」，ʃʃi munu「寒い（もの）」や fukarasɨ munu「うれしい（もの）」，husu munu「欲しい（もの）」のように感覚に関わる形容詞や感情に関わる形容詞が多いようだが，確かなことはわからない．興味深いことに同じ感覚形容詞でも，(18) の場合は munu があってもなくても自然だが，(19) の場合は munu のない (19b) は不自然であると言う．

(18)　a.　baː　ʃʃi　munu
　　わたし 寒い もの
　　b.　baː　ʃʃi
　　わたし 寒い
　　「わたしは寒い」

(19)　a.　baː　atsɨ　munu
　　わたし 暑い もの
　　b.　??baː　atsɨ
　　わたし 暑い
　　「わたしは暑い」

-kai 形も叙述の機能を持つが，主に焦点形の =du と共に用いられて，焦点のあるものがより何々だ，という比較の意味が出る (20).

(20)　unu　kiː=nu=du　taka-kai
　　この 木=NOM=FOC 高い-VBLZ
　　「この木のほうが高い」

-kai 形が持つ連体修飾の機能について，用例は確認できたものの，-kai 形が連用修飾に用いられた場合どのような意味を持つかまでは調査できなかった．林 (2013: 118) では次のように述べている．

> 名詞修飾要素という観点から形容語根と -kai 形とを比較すると，-kai 形はスケールをもった表現となる（比較構文）．例えば，taka hitu（高い＋人）「背の高い人」に対し，taka-kai hitu では，比較対象がある中でより背の高い人という意味になる．

ここではエリシテーションで得た，-kai 形が連体修飾に用いられている用例のみ提示しておく (21).

(21)　aka-kai　munu fiː-sama-ti
　　赤い-VBLZ もの　やる.CVB-HON-IMPR
　　「赤いのをください」

4　形容詞と動詞の異同

ここでは湯湾方言と池間方言の形容詞の活用を，動詞と比較しながらまとめる．すでに述べたように湯湾方言の場合は -sa 形に ar-（ある）あるいは nən（ない）を付けて活用させる．池間方言の場合は -kai 形か -fu 形を利用する．これは共通日本語でイ形容詞が「大きかった（大き-く-あった）」のように「-く-ある」の力を借りて活用をするのと似ている．

表 3　湯湾方言と池間方言の形容詞活用

	湯湾方言		池間方言	
	形容詞 hɨssa「高い」	動詞 mijui「見る」	形容詞 taka「高い」	動詞 jum「読む」 （連体形のみ fau「食べる」）
否定形	hɨ-ssoː nən	mij-an	taka-f=fa njaːn	jum-an
過去形	hɨ-ssaː-**ta**	mi-**tʃa**	taka-ka-**tai**	jun-**tai**
副動詞形（条件）	hɨ-ssa-**ppoː**	mij-u-**ppoː**	taka-kai-**tigaː**	jun-**tigaː**
連体形	hɨ-ssa-**n**	mij-u-**n**	taka bitu	fau munu [1]

表 3 を見るとわかる通り，湯湾方言も池間方言も否定形は動詞と異なるものの，他の過去形，副動詞形（条件），連体形に関しては同じ活用タイプである．否定形に関して，湯湾方言の形容詞は nən，池間方言は形容詞の -fu 形に njaːn を用いて，どちらも「ない」を用いる点は共通している．その他の活用形に関して，湯湾方言は -sa 形に ar-（ある）を付加して活用している．一方，池間方言では -kai 形により動詞化することで活用している．両言語で違いがあるのは連体形である．湯湾方言の形容詞は語根形の他に連体形を備えているが，池間方言の形容詞は語根形が連体形を兼ねている．池間方言の動詞も特に連体形のみの形は持たず，終止形が連体形を兼ねる．

5　形容詞と名詞の異同

共通日本語においても形容動詞の語幹は名詞とほとんど同じ振る舞いをするというように，形容詞と名詞の異同も問題となる．さらに，共通日本語で「まだまだ子供だ」というときの「子供（だ）」は，名詞で指示対象があるというよりも形容詞に近い．

湯湾方言も池間方言も，形容詞の語根形は名詞のように，そのまま項になることができない．湯湾方言であれば次の (22) のように形式名詞 sɨ を用い，池間方言であればすでに挙げた (21) のように形式名詞 munu を用いる．

(22)　hɨ-ssa　ssɨ=ba　kɨrɨ-rɨ
　　大きい-NMLZ の=ACC くれる-IMPR
　　「大きいのをくれ」

[1] データは林 (2013: 189) の談話資料より．

湯湾方言では形容詞 wassa「悪い」が名詞として使われているような例もあった (23).

(23) wa-ssa sɨn-na
悪さ-NMLZ する-PROH
「悪さするな」

形容詞と名詞の異同が特に問題となるのは池間方言である．すでに述べたように taka dai（高い + 値）「高い値」は形容詞のようにも名詞のようにも振る舞う．その証拠として，例えば jasu「安い」は副動詞形で理由を表す場合 (24) のように -kai 形のみを取りコピュラは取らないが，taka dai の場合は (25) のようにどちらも可能だと言う．taka dai の振る舞いは過去形においても同様である．

(24) a. jasu-kai-ba ka-i
安い-VBLZ-RSN 買う-IMPR

b. * jasu-jai-ba ka-i
安い-COP-RSN 買う-IMPR
「安いから買え」

(25) a. taka dai-kai-ba kaː-dʒaːn
高い 値-VBLZ-RSN 買う-VOL.NEG

b. taka dai-jai-ba kaː-dʒaːn
高い 値-COP-RSN 買う-VOL.NEG
「高いから買わない」

すでに挙げた hu-gui（大きい + 声）「うるさい」も同様に -kai 形とコピュラのどちらも取りうる．さらに興味深いことに，muzukasɨ「難しい」と hinna「変な」は複合形でないにも関わらず taka dai と同じ振る舞いを見せる (26), (27).

(26) a. muzukasɨ-kai-ba
難しい-VBLZ-RSN

b. muzukasɨ-jai-ba
難しい-COP-RSN
「難しいから」

(27) a. hinna-kai-ba
変な-VBLZ-RSN

b. hinna-jai-ba
変な-COP-RSN
「変だから」

6 さいごに

本発表では湯湾方言と池間方言の形容詞について，主にエリシテーションのデータに基づいて記述した．湯湾方言の -sai 形や池間方言の munu 形の機能については今後さらに調査が必要である．

略号一覧

ACC: accusative 対格
ADN: adnominal 連体
ADVLZ: adverbalizer 副詞化辞
CND: conditional 条件
COP: copula コピュラ
CVB: converb 副動詞
FOC: focus 焦点
HON: honorific 尊敬
IMPR: imperative 命令
NEG: negative 否定
NOM: nominative 主格
NOM: nominaliver 名詞化辞
NPST: non-past 非過去
PROG: progressive 進行
PROH: prohibit 禁止
PST: 過去
QUOT: quotation 引用
RSN: reason 理由
SFP: sentence final particle 終助詞
TOP: topic 主題
VBLZ: verbalizer 動詞化辞
VOL: volitional 意志

引用文献

林由華 (2013)『南琉球宮古語池間方言の文法』京都大学大学院文学研究科博士論文
名嘉真三成 (1986)「琉球方言の形容詞」,『琉球大学教育学部紀要』29(1)，pp. 46-71，琉球大学教育学部
Niinaga, Yuto (2014) *A Grammar of Yuwan, a Northern Ryukyuan Language*. Unpublished PhD dissertation, the University of Tokyo
下地理則 (2010)「琉球諸語に活用型形容詞は存在するか? ――伊良部島方言の場合――」， *International journal of Okinawan studies* 1(2)，pp. 41-51，琉球大学国際沖縄研究所

[付録]

表 4　湯湾方言の形容詞パラダイム

	非過去・終止	過去・終止	否定・非過去・終止	否定・過去・終止	非過去・連体	過去・連体	否定・非過去・連体	否定・過去・連体
hɨssa/hiːsa「大きい」	hɨssa/hiːsa	hɨssaːta/(hiːsaːta)	hiːsoː nən	hiːsoː nənta	hɨssan/hiːsan	hɨssaːtan/hiːsaːtan	hiːsoː nən	hiːsoː nəntan

	連用修飾「～く」	連用修飾「～から」	連用修飾「～れば」	疑問	推量
hɨssa/hiːsa「大きい」	hiːku, hiːsamma	hiːsan munnatɨ	hɨssattoː/hiːsattoː, hɨssappoː	hɨssannja	hɨssan aranna

表 5　池間方言の形容詞パラダイム

	非過去・終止	過去・終止	否定・非過去・終止	否定・過去・終止	非過去・連体	過去・連体	否定・非過去・連体	否定・過去・連体
taka「高い」	-	takakatai	takaffanjaːn	takaffanjaːddan	taka	takakatai (?)	takaffanjaːn	- (*takaffanjaːddan)

	連用修飾「～く」	連用修飾「～から」	連用修飾「～れば」	疑問
taka「高い」	takaːtʃa, takaːn, takafu	takakaiba	takakaitigaː	taka giːna (高い 木 疑問)

湯湾方言と池間方言の副詞節に関する一考察[1]

東京外国語大学 博士前期課程　呉唯

0.　はじめに

本稿では、北琉球奄美大島湯湾方言と南琉球宮古島池間方言の副詞節について、言語類型論的な観点からその諸特徴を概観した上で、両方言の副詞節を対照することで、それぞれの相違点及び類似点を明らかにすることを目的とする。

まず、1 節では言語類型論の観点から副詞節について考察を行った先行研究である Thompson & Longacre (1985)を紹介し、2 節では湯湾方言、3 節では池間方言の副詞節を記述する。そして最後に、4 節において全体のまとめ及び今後の課題について述べる。

なお、本稿の音声表記[2]、例文、日本語訳、下線など、特に断りがない限り、筆者によるものである。

1.　Thompson & Longacre 1985

Thompson & Longacre (1985)では言語類型論的な観点から、副詞節の形態統語及び意味的な特徴について考察を行っている。

Thompson & Longacre (1985)によると、副詞節とは、文あるいは動詞句を修飾する従属節である。通言語的に、副詞節を形成する際に、典型的には以下の三つの手法がある:

i. 従属形態素 (subordinating morphemes)

ii. 特別な動詞形式 (special verb forms)

iii. 語順 (word order)

---

[1] 本稿は 2016 年 8 月東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で行われた琉球語言語研修において収集した宮古語池間方言と奄美語湯湾方言のデータに基づいて執筆した。宮古語池間方言は仲間博之氏 (宮古島市平良西原出身、1947 年生まれ、男性)、奄美語湯湾方言は直三男也氏 (鹿児島県大島郡宇検村湯湾出身、1953 年生まれ、男性)の両氏に協力を得たものである。この場を借りて感謝を述べたい。なお誤りは全て執筆者の責任である。

[2] 今回の調査では、音声学・音韻論について深く調べていないが、音声表記について、池間方言: [p、b、t、d、k、g、f、v、s、z、ts、dz、tʃ、h、ʃ、ʒ、ç、m、n̩、n、r、w、j、a、i、u、e、o、ɨ]、湯湾方言: [p、b、t、d、k、g、ʔ、s、z、ts、x、h、ʃ、ʒ、ç、tʃ、m、n、r、w、j、a、i、u、e、o、ɨ、ə]に統一することにした。

Thompson & Longacre (1985)によると、通言語的に、副詞節の意味役割によって、以下のような 12 種類に分類することができる。

時間 (time)、場所 (location)、方法 (manner)、目的 (purpose)、原因 (reason)、状況 (circumstantial)、同時 (simultaneous)、条件 (conditional)、譲歩 (concessive)、代替 (substitutive)、追加 (additive)、絶対的 (absolutive)

2. 湯湾方言の副詞節

2.1 副詞節の形成について

既に 1. 節で触れたように、一般的に副詞節を形成する形態統語的手法は三つある。今回の調査結果によって、湯湾方言では i. 従属形態素と ii. 特別な動詞形式という二種類の副詞節を形成する手法があると考えられる。i. と ii. を分ける基準は 1)が示しているように、i. 従属形態素は動詞語根と直接組み合わせることができないが、ii. 特別な動詞形式(すなわち、動詞接辞)は直接動詞語根と組み合わせることができる。

1) [terebi ba mi-**tʃɨ** /***sɨga**, ...]
テレビ ACC 見る-**tʃɨ/sɨga**
「(lit.)テレビを見て/*見けど, ...。」

以下では、今回の調査で得た、副詞節を形成する手法に対応する諸形式を表 1 にまとめる。

表 1: 湯湾方言における副詞節を形成する形式

形態・統語的手法	各種形式	日本語訳[3]
i. 従属形態素	***~nati***	*~ので*
	~ba	*~から*
	~ʒaga	*~だから*
	~tami(n)	*~ため(に)*
	~sɨga	*~けど*
	~mun	*~もん*
ii. 特別な動詞形式	***-boo、-ppo***	*-なら*
	-təəra	*-たら*

[3] ここでは、便宜上日本語訳を使用したが、両形式の間に一対一の関係はない。

	-nagatii	***-ながら***
	-ti	***-て***
	-(t)too	***-と***

なお、表 1 で示された各形式の意味機能について、2.2 節で詳しく説明する。

そして、今回の調査では、表 1 で示した各形式と組み合わせ可能な動詞活用形[4]を調べた。その結果を以下の表 2 にまとめる。なお、「形式の意味が分かる、自分も使う。」と話者から返答があった場合「+」でマークする、「形式としては成立可能かもしれないが、自らは使わない」と話者が判断した場合は「△」でマークする、「明らかに異常なもの、自分では使わない、聞いたこともない」という場合は「-」でマークする。なお、例文が確認できていない場合、斜線にする。

表 2: 前接可能な動詞活用形

	V_{root}	***V-ju***	***V-ju-n***	***V-jan***	***V-ta***	***V-ri***	***V-oo***	***V-ju-n mun***
~nati	-	-	+	+	-	-	-	+
~ʒaga	-	-	+	+	-	-	-	△
~tami(n)	-	-	+	+	-	-	-	
~ba	-	+	+	+	+	-	-	
~siga	-	+	+	+	+	-	-	
-boo	△	-	+	-	-	-	-	
-ppo	+	+	-	-	+	-	-	-
-(t)too	+	+	-	+	-	-	-	-
-təəra	+	-	-	-		-	-	-
-nagatii	+	-	+	-	-	-	-	-
-ti	+	-	-	+	-	-	-	-

まず注目されたいのは、***V-ri***(命令形)と ***V-oo***(意志形)の二列である。この二つの活用形は副詞節を形成することができない。専ら主節で用いられる形式と思われる。

[4] 湯湾方言の動詞活用形については、紙幅の都合上、ここでは割愛する。動詞活用形の詳細について Niinaga(2014)を参照する。

そして、もう一つ表 2 から分かることがある。話者によると、***-boo*** と***-ppo*** 両形式の意味は殆ど同じである。一方、表 2 が示しているように、***-boo*** が現れる環境には***-ppo*** は必ず現れない。よって、両者は相補分布をなしており、互いに異形態であると考えられる。

2.2 意味役割による副詞節の分類

すでに 1. 節で述べたように、その意味役割によって、副詞節を細かく分類することができる。2.1 節で挙げた副詞節を形成する各形式をそれぞれの意味によって、ここで改めて整理する。

表 3: 意味役割による各形式の分類

意味役割	対応形式	意味役割	対応形式
原因・理由(reason)	*~natɨ*、*~ʒaga*、*~ba*	時間の前後関係(time)	*-təəra*
仮定・条件(conditional)	*-boo*、*-ppo*、*-(t)too*	逆接(paradox)	*~mun*、*~sɨga*
目的(purpose)	*~tamɨ (n)*	同時(simultaneous)	*-nagatɨɨ*
継起(time)	*-tɨ*		

次に、各意味役割における副詞節の例文を示す:

2) [denʃa nu k-om mun **natɨ** ukurɨ-ta]
電車 NOM 来る-NEG DMN **natɨ** 遅れる-PST
「電車が来ないもんだから、遅れた」(原因・理由)

3) [setsɨmeeʃo ba jum-**boo**/jum-**ju-ppo** waa-ju ttoo]
説明書 ACC 読む-**boo**/読む-**ju-ppo** 分かる-ju SFP
「説明書を読めば、分かるよ」(条件・仮定)

4) [benkjoo s-ju-n **tamɨ (n)** hon ba koo-ta]
勉強 する-ju-PTCP **tamɨ (n)** 本 ACC 買う-PST
「勉強するため(に)、本を買った。」(目的)

5) [terebi ba mi-**tʃəəra**[5] xanmɨ ba kam-oo.]

[5] 湯湾方言では、母音[i]の後ろに、破裂音が口蓋化することがある。

テレビ ACC 見る-**tʃəəra** ご飯 ACC 食べる-INT

「テレビを見て(終わったら)、ご飯を食べよう。」(時間の前後関係)

6) [hon ba ju(m)-da-n **siga** waa-ran-ta.]

本 ACC 読む-PST-PTCP **siga** 分かる-NEG-PST

「本を読んだけど、分からなかった。」(逆接)

7) [terebi ba mi-**nagatii** xanmi ba kam-oo]

テレビ ACC 見る-**nagatii** ご飯 ACC 食べる-INT

「テレビを見ながら、ご飯を食べよう」(同時)

8) [bentuu ba koo-**ti** ka-da]

弁当 ACC 買う-**ti** 食べる-PST

「お弁当を買って、食べた。」(継起)

なお、例文 8)のように、***-ti*** を用いて、複数の従属節を並列することができる。

9) [sikama xii-**ti** tsira ara-**ti** asaban ka-**di** jaa iʒi-ta]

朝 起きる-**ti** 顔 洗う-**ti** 朝ご飯 食べる-**ti**、 家 出る-PST

「朝起きて、顔洗って、ご飯食べて、出かけた。」

Thompson & Longacre(1985)によると、「xii-ti」、「ara-ti」は主節と直接的な関連性がないため、副詞節として扱わないと言う。そうすると、例文 7)の***-ti*** と例文 8)の***-ti*** について別々の形態素を立てるのか(同音異義語)。あるいは、同じ形態素として扱い、7)と 8)における機能的な共通点を探るのか、さらに研究する必要がある。

3. 池間方言の副詞節

池間方言では、湯湾方言と同じく、Thompson & Longacre (1985)が言う i.と ii.の二種類の副詞節を形成する手法を持つ。異なる手法によって、副詞節を形成する形式を以下のように分類する。

表 4: 池間方言における副詞節を形成する形式

形態・統語的手法	各種形式	日本語訳
i. 従属形態素	***~ba***	*~ので/~なら*
	~kjaa	*~時*
	~suga	*~けど*
ii. 特別な動詞形式	***-i/-da***	*-て/-なくて*
	-tigaa/-dakaa	*-たら/-なかったら*
	-ccjaan	*-ながら*

表 4 が示しているように、池間方言の特徴的な点は、動詞形式に肯定と否定の二種類の接辞があるという点である。さらに、湯湾方言との相違点として、池間方言の***~ba*** には原因と条件の両者の意味を表すことができるという点も挙げることができる。

各形式の意味役割によって、表 5 のように整理することができる。

表 5: 意味役割による各形式の分類

意味役割	対応形式	意味役割	対応形式
原因・理由(reason)	*~ba*	同時(simultaneous)	*-ccjaan*
仮定・条件(conditional)	*~ba*、*-tigaa/-dakaa*	継起(time)	*-i/-da*
逆接(paradox)	*~suga*		

以下では、それぞれの形式を含む例文を挙げる:

10) [uman taka dukunu jai **ba** kama n a ifu na]
ここは 高い ところ COP **ba** あそこ DAT TOP 行く SFP
「ここは高いところだから、そこには行くな。」(原因)

11) [din (n)u much-a-ddan **ba** bento (j)a ka-ai-n doo]
お金 ACC 持つ-THM-NEG.PST **ba** 弁当 TOP 買う-POSS-NEG SFP
「お金を持っていなかったら、弁当は買えないよ。」(条件)

12) [munu u fa-a-**dakaa** asub-ai-n]
もの ACC 食べる-THM-**dakaa** 遊ぶ-POSS-NEG

「ものを食べなかったら、遊べない。」(条件)

13) [ba a nkjaan a ʃɨʃɨ a-tai **suga**, nnama namari-i ui.]
1SG TOP 昔 TOP 先生 COP-PST **suga** 今 やめる-i PROG
「私は昔は先生だったけど、今はやめている。」(逆接)

14) [terebi u mi-i-**ttʃaan** du fau-tai]
テレビ ACC 見る-THM-**ttʃaan** FOC 食べる-PST
「テレビを見ながら、食べた。」(同時)

15) [saki (j)u numi-**i** bjui-tai]
酒 ACC 飲む-**i** 酔う-PST
「酒を飲んで、酔った。」(継起)

また、***-i*** 形式は例文 8)と同じように複数の従属節を形成することができる。

16) [saki (j)u numi-**i** munu u fa-**i** njuu-tai]
酒 ACC 飲む-**i** もの ACC 食べる-**i** 寝る-PST
「酒を飲んで、ものを食べて、寝た。」

4. まとめと今後の課題

2. 節と 3. 節で示している湯湾方言と池間方言の副詞節の形態・統語・意味的な特徴をまとめると、以下のような共通点と相違点をあげることができる:

共通点:

(1)両言語共に、従属形態素及び特殊な動詞形式という二種類の副詞節を形成する手法を持つ。

(2)本島方言と同じように、両言語ともに「テ形」という特殊な動詞形式を持つが、「テ形」をどのように扱うのかという点は、まだ問題点として残っている。

相違点:

(1)池間方言では、各動詞形式において、肯定形と否定形がそれぞれ別の形態素を持っている。それに対して、湯湾方言では否定の副詞節を作る時、専ら動詞否定形+副詞節接辞の形で実現する。

(2)池間方言の***-ba*** は原因と条件両方の意味を表すことができるが、湯湾方言の***-ba*** は原因しか表すことができない。

今回の調査では、網羅的に両言語の副詞節について調べたが、細部については触れていない所が多い。まず、最も重要なのは、「テ形」の問題である。そもそも、「テ形」を副詞節のグループの中に入れるべきかどうかを検討しなければならない。そして、両言語で見られる***-ba*** 形式がもし語源的に同じものであれば、歴史的にどのような変化を経て、池間方言のように原因と条件の両者の意味を表すようになったのか、共時的に原因と条件の意味をどのように関連付けられるのかについてさらなる調査が必要である。

参考文献

Niinaga, Yuto. 2014. A grammar of Yuwan, a northern Ryukyuan language. Unpublished PhD dissertation submitted to the University of Tokyo.

Thompson, Sandra A., and Robert E. Logacre. 1985. Adverbial clauses. In Shopen, Timothy, ed., *Language typology and syntactic description* (2), 171-234, Cambridge: Cambridge University Press.

略号一覧

1: 一人称
ACC: 対格
COP: コピュラ
DAT: 与格
DMN: 形式名詞
INT: 意志
NEG: 否定
NOM: 主格
POSS: 可能
PROG: 進行
PST: 過去
PTCP: 分詞
SFP: 文末助詞
SG: 単数
THM: 語基母音
TOP: 主題

Peripheral Cases and Dativish Cases in Japonic Languages*
-Ikema, Yuwan and Tokyo-

Sakuma Atsushi (Nanzan University/m15hl007@m.nanzan-u.ac.jp)

1. Cases and Peripheral Cases

It is said that some languages have "case." In this paper, "case" is defined as (1).

(1) A (zero) case marker expresses the grammatical relationship of a constituent[1] to its head at some point.

According to Blake (1994, p34), cases can be divided into two groups: core cases (which are marked on complements of typical one-place and two-place transitive verb; nominative, accusative and ergative) and peripheral cases. In this paper, I show peripheral cases in Ikema (dialect), and in Yuwan (dialect), and then I show so-called "dative-like" cases in Ikema and Yuwan. Ikema is a member of Southern Ryukyuan, and Yuwan is a member of North Ryukyuan, which are members of Japonic Languages. Tokyo (dialect) is a member of Japanese languages, which are also members of Japonic languages.

2. Dativish Cases (Dative-like case)

It is said that some languages have dative cases, which are marked on indirect objects (Blake 2006, p. 212) or which are marked on benefactive NPs (Uriagereka 2003, p.265). In addition, Shimoji (2008) claims that a dative is attached to the below NPs:

> … dative code core argument NPs, though dative-marked core arguments are highly constrained (occurring only in the dative subject constructions [DSC]…). The dative may also, along with the allative, mark an (extended) core argument [(cf. causee, agent of passive construction (PC) and result of change)]. Dative and allative also function to mark locative and goal peripheral arguments [(cf. location & time and goal)] respectively. (p.189)

In this paper, dative-like cases, which are attached to a subject of DSC, a causee, an agent of PC, a result of change, location & time NP or a goal (hereinafter DNPs), are called as dativish cases (DAS).

---

* I am deeply indebted to Nakama Hiroyuki (Ikema) and Sunao Mioya (Yuwan) for assistance and patience with our research and for sharing their language with us. I am also indebted to Shimoji Michinori and Niinaga Yuto for valuable comments on an earlier version of this paper. I am grateful for Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, giving me opportunity for training to conduct field linguistics. Finally, I would like to thank Doan Le Hoai Ahn, Haku Hikari, Nakajima Ai, Sasaki Tomomi, Tanaka Tatsuhiko and other people for their helpful comments and/or judgments. In this paper, the following abbreviation will be used: ALL＝Allative, ABL＝ Ablative, ACC＝ Accusative, ASC＝ Associative, CAUS＝ Causative, CMP＝ Comparative, DAT＝ Dative, DAS＝ Dativish, GEN＝Genitive, INS＝ Instrumental, LAT＝ Lative, LIM＝Limitative, LOC＝ Locative, NOM＝ Nominative, PAST＝Past tense, PRES＝Present tense, TOP＝Topic, 1SG＝First Singular Pronoun, 1PL＝First Plural Pronoun, 2PL＝ Second Plural Pronoun

[1] Basically cases are marked on noun phrases, but cases are also marked on adjectives and determiners.

3. Peripheral Cases in Ikema and Yuwan

Based on (1) and Blake's classification, peripheral cases in Ikema can be listed in (2) and peripheral cases in Yuwan can be listed in (3). (2) and (3) showed that Ikema and Yuwan have more peripheral cases than Tokyo[2]. Especially, Ikema has two Dativish cases (＝n and ＝ŋkai) and Yuwan has four Dativish cases (＝nin, ＝n, ＝nan, ＝katʃi, ＝ttʃi and ＝φ), though Tokyo has only one Dativish case (＝ni).

(2) Peripheral Case forms and their functions in Ikema: Sort by Form

Form	Function	Name
＝n	agent of passive, result of change locative, benefactive	DAS
＝ŋkai	causee, goal, benefactive	DAS
＝çiː	instrument	INS
＝tu	associated motion	ASC
＝taːçiː	limit	LIM
＝kara	source, path	ABL
＝ntsukjaː	comparative 'than'	CMP

(3) Peripheral Case forms and their functions in Yuwan: Sort by Form

Form	Function	Name
＝nin[3]	causee, benefactive, agent of passive, result of change, location	DAS
＝n	causee, benefactive, agent of passive, result of change, location	DAS
＝nan	agent of passive, location	DAS
＝φ	result of change	DAS
＝katʃi, ＝ttʃi[4]	causee, benefactive, agent of passive, result of change, goal	DAS
＝ʃi	instrument	INS
＝nantɨ	location	LOC
＝gadɨ	limit	LIM
＝kara	source, path	ABL
＝jumːa, ＝jukːa	comparative 'than'	CMP

4. Dativish Cases in Ikema

From our collected data, in Ikema, ＝ŋkai is marked on a causee(see (4b)) and on a goal (see (4g)); ＝n is marked on an agent of passive construction (see (4c)) on a result of change (see (4d)) and on location & time (see (4f)); and ＝n and ＝ŋkai are marked on goal (see (4e)). These differences are summarized as (5).

---

[2] Tokyo has peripheral cases as below: ＝ni (subject in DSC, causee, agent of PC, result of change, benefactive, location& time, goal; DAS), ＝e (goal; ALL), ＝de (instrument, location: INS, LOC), ＝to (associated motion: ASC), ＝made (limit; LIM), ＝kara (source; ABL) ＝jori (comparative 'than'; CMP)

[3] Niinaga (2014, p.149-150) claims that ＝nin (Dative) is an allomorph of ＝n (Dative), and ＝nin (Locative) is an allomorph of ＝nan (Locative). However, I did not find any evidence supporting or denying Niinaga's claims. Therefore, I consider that ＝nin, ＝n and ＝n are different case makers in this paper.

[4] Niinaga (2014, p.146-147) claims that ＝ttʃi is an allomorph of ＝katʃi. However, our native speaker used ＝katʃi where＝ ttʃi is expected to appear according to Niinaga's discussion. Thus, I consider ＝katʃi and ＝ttʃi different case makers in this paper.

(4) a. subject in DSC: There are no data

b. causee

m:a = ga: f:a = **ŋkai** munu = u fii-tai

mother = NOM child = DAS food = ACC feed-PAST

'A mother let her child eat'

c. agent of passive construction

kato: = ja oku = **n** zumiku ʔtakaitai

Kato = TOP Oku = DAS hardly hit-PAST

'Kato was hit hardly by Oku'

d. result of change

to:kjo:gaidai = nu ʃiiʃii = **n** naradi

TUFS = GEN teacher = DAS become

'(I) become a TUFS teacher'

e. benefactive

i. banu = **n** hun = nu fi:-samati:

me = DAS book = ACC give-please

'Please give a book to me'

ii. tuzu = **ŋkai** tigani = u kau-tai

wife = DAS ring = ACC buy-PAST

'I bought a ring for my wife'

f. location & time

sanʤi = **n** matʃi:ui

3 o'clock = DAS wait

'(I) wait (for you to come) at 3 o'clock'

g. goal

nu:ma = ɕi: suma = **ŋkai** itsɨ

horse = INS village = DAS go

'(I) go to a village by horseback'

(5) Dativish cases in Ikema

thematic roles	= n	= ŋkai
subject in DSC	ND	ND
causee	ND	✓
agent of PC	✓	ND
result of change	✓	ND
benefactive	✓	✓
location & time	✓	ND
goal	ND	✓

(✓:Grammatical, *: Ungrammatical, ND: No Data)

5. Dativish Cases in Yuwan

From our collected data, in Yuwan, = nin, = n, = katʃi and = ttʃi are marked on causees (see (6b)) and on benefactives (see (6e)); = nin, = n, = katʃi, = ttʃi and = nan are marked on agents of passive construction

(see (6c)); =nin, =n, =katʃi, =ttʃi and =φ are marked on results of change (see (6d)); =nin, =n and =nan are marked on location & time (see (6f)); and =katʃi and =ttʃi are marked on goals (see (6g)). These differences are summarized as (7).

(6) a. subject in DSC: There are no data

b. causee

i. taro:={**nin**/=**ttʃi**} mitʃi=ba haʃir-aʃui
taro=DAS road=ACC run-CAUS
'(I) make/let Taro run a road'

ii. okkaŋ=ga warabɨ=**n** hammɛ:=φ kam-aʃui
mother=NOM child=DAS food=ACC eat-CAUS
'A mother let child eat'

iii. * tʃan=ja kjaku=**nan** sara arawaʃa
father=TOP visitor=DAS dish wash-CAUS
'My father make a visitor wash a dish'

iv. taro:= **katʃi** tsɨe=ba ur-aʃui
Taro=DAT cane=DAS break-CAUS
'(I) make/let Taro break a cane'

c. agent of passive construction

i. am:a:{=**nin**/=**n**} kurausat-ta
mother=DAS hit-PAST
'(I) was hit by my mother'

ii. uja=**nan** kurausat-ta
mother=DAS hit-PAST
'(I) was hit by my mother'

iii. taro:=**ttʃi** guʃ:an=ba urat-tɨ
Taro=DAS cane=ACC break-PAST
'A cane is broken by Taro'

iv. taro:=ja ʒiro:=**katʃi** tsuburu=**ba** kurawasat-ta
Taro=TOP ʒiro:=DAS head=ACC hit-PAST
'Taro was hit in the head by ʒiro'

d. result of change

i. ɸudep:o sense:=**nin** nai-tʃasa
grow up teacher=DAS become-want
'When I grow up, I want to become a teacher'

ii. wam=ba ura dusɨ=**n** si-kkurirankai
me=ACC 1SG friend=DAS make-please
'Please make me your friend'

iii. * ko:ri=nu tɨkɨti mɨzɨ=**nan** natta
ice=NOM melt water=DAS become-PAST
'Ice melted and then turned into water

iv. ɸudep:o sense:=**katʃi** nai-tʃasa
grow up teacher=DAS become-want

'When I grow up, I want to become a teacher'

v. ko:ri = nu tɨkɨti mizi{ = **tʧi**/ = **φ**} nat-ta
ice = NOM melt water = DAS become-PAST
'Ice melted and then turned into water'

e. benefactive

i. un hon = ba wan = **nin** kartʃi-kurɨrɨ
that book = acc 1SG = DAS lend-please
'Please lend me that book'

ii tuʤi = **n** hon = ba kurijui
wife = DAS book = ACC give
'(I) give my wife a book'

iii. * tuzin = **nan** jubiwa = ba ko:ta
wife = DAS ring = ACC give
'(I) give my wife a ring'

iv. wa:kja = **kaʧi** urakja: sjumi = ba jusɨtɨ-kurɨrɨ
1PL = DAS 2PL hobby = ACC tell-please
'Please tell us your hobby'

v. hanako = ja taro: = **tʧi** hana = ba ko:tɨ-jaraʃui
Hanako = TOP Taro = DAS flower = ACC buy-give
'Hanako buys flowers for Taro'

f. location & time

i. sanʒi = **nin** kuma kaʧiko:
3 o'clock = DAS here come
'Come here at 3 o'clock'

ii. sanʒi = **n** gakko = ntɨ matio:ʃui
3 o'clock = DAS school = LOC meet
'(I am going to) meet in a school at 3 o'clock'

iii. amakuma = **nan** nunkui ʔukuna
lither and thither = DAS anything lie-not
'Don't lie hither and thither'

iv. * sanʒi{ = **kaʧi**/ = **tʧi**} gakko: = ntɨ maʧio:ʃui
3 o'clock = DAS school = LOC meet
'(I am going to) meet in a school at 3 o'clock'

g. goal

i. sanʒi{ = **nin**/ = **n**/ = **nan**} jaʃin gakko: = ntɨ içui
3 o'clock = DAS absolutely school = LOC meet
'(I am going to) go to a school by 3 o'clock'
'(I am going to) go to a school at 3 o'clock'

ii. jama: = **tʧi** nubujui
mountain = DAS climb
'(I) climb up a mountain'

iii. duʃi = tu jama = **kaʧi** iʒa
friend = ASC mountain = DAS went

'(I) went to a mountain with my friend'

(7) Dativish cases in Yuwan

thematic roles	=nin	=n	=nan	=ttʃi	=katʃi	=φ
subject in DSC	ND	ND	ND	ND	ND	ND
causee	✓	✓	*	✓	✓	ND
agent of PC	✓	✓	✓	✓	✓	ND
result of change	✓	✓	✓	✓	✓	✓
benefactive	✓	✓	*	✓	✓	ND
location & time	✓	✓	✓	*	*	ND
goal	*	*	*	✓	✓	ND

(✓:Grammatical, *: Ungrammatical, ND: No Data)

6. Discussion and Future Works

It is a salient characteristic that Ikema and Yuwan do not have dativish cases attached to all DNP. In Tokyo, =ni can be marked on all the DNPs[5] but for instance, in Yuwan, =nin is never marked on goal. When Tokyo is learned, it is just memorized that =ni can be marked on all the DNPs but when Ikema or Yuwan is learned, it must be memorized which case marker can be marked on which DNPs respectively. Conversely, in Tokyo a DNP role in a sentence cannot be completely understood only listening or reading followed dativish case marker =ni but in Ikema and Yuwan a DNP role can be roughly understood listening or reading an attached dativish case. In short, about dativish cases, both Ikema and Yuwan are more iconic but less economical than Tokyo. Finally, it is evident that we should mainly research on three topics in the future; 1) whether Ikema and Yuwan have dative constructions[6]? 2) what DNPs can =n and =ŋkai in Ikema be attached to? and 3) what DNP can =φ in Yuwan be attached to?

Reference

Blake, J. Barry (1994). *Case*. Cambridge: Cambridge University Press. Blake, J. Barry (2006). Case. In Keith Brown & Anne H. Anderson (eds.), *Encyclopaedia of Language & Linguistics*. (vol. 1, pp. 212-220). Oxford: Elsevier. Waltham, Mass.: Ginn. Oxford: Oxford University Press. Niinaga Yuto (2014). *A Grammar of Yuwan, a Northern Ryukyuan Language* (Unpublished doctoral dissertation). The University of Tokyo. Shimoji Michinori (2008). *A Grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language* (Doctoral dissertation). The Australian National University. Uriagereka, Juan (2003). Case Theory. In William J. Frawley (ed.), *International Encyclopaedia of Linguistics* (2nd ed.). (vol1, pp. 265-269). Oxford: Oxford University Press.

[5] In Tokyo, ABL (=kara) can be marked on agent of PC and ALL (=e) can be marked on benefactive and goal. However, they are not marked on other thematic roles' noun phrases (cf. causee, result of change) so I do not consider them as Dativish cases.

[6] Niinaga (2014, p.159) reports that Yuwan dialect has a dative construction (see below).

TM: wannin kakarɨssa.
wan=n=n kak-arɨr-sa
1SG=DAT1=also write-CAP-POL
'I also can write (it).' (Niinaga 2014, p.159)

宮古語池間方言と奄美語湯湾方言の動詞活用

陶天龍

1. 池間方言

池間方言の動詞は大きく二種類に分けられる。それぞれ GROUP 1 と GROUP 2 と呼ぶことにする。

1.1 GROUP 1

GROUP の動詞はすべて i で終わる。この種類の動詞は語幹の後にそのまま接辞をつけることが可能である。

(1)

	語幹	肯定非過去	否定非過去	肯定過去	否定過去	連用形	命令形	仮定形
見る	mi:-	mi:-Ø	mi:-n	mi:-tai	mi:-ddan	mi:	mi:-ru	mi:-ba
上げる	agi-	agi(:)-Ø	agi-n	agi(:)-tai	agi-ddan	agi-:	agi-ru	agi-ba
起きる	uki-	uki(:)-Ø	uki-n	uki(:)-tai	uki-ddan	uki-:	uki-ru	uki-ba

肯定非過去の接辞は-Ø で、つまり動詞語幹そのままの形であるが、語幹末音節は短母音の場合、肯定非過去と肯定過去は語幹末母音が長母音になってもよい。また、連用形は-i をつけて、長母音になるが、語幹末音節はすでに長母音の場合、さらに伸びる必要はない。

(2) 上げる　agi/agi:　　上げた　agi-tai/agi:-tai
(3) 見て　mi:/*mi:-:

1.2 GROUP 2

この種類の動詞は、命令形以外、挿入母音を介して接辞をつける必要がある。語幹の種類によってさらにいくつかのタイプに分けられる。また、肯定非過去と肯定過去の挿入母音は同じであり、語幹の種類によって違う。

(4) GROUP 2(a-1)　1 語幹動詞（語幹は母音終わり、肯定非過去の挿入母音は-u）

	語幹	肯定非過去	否定非過去	肯定過去	否定過去	連用形	命令形	仮定形
買う	ka-	ka-u-Ø	ka-:-n	ka-u-tai	ka-:-ddan	ka-i-:	ka-i	ka-i-ba

(5) GROUP 2(a-2)　1 語幹動詞（語幹は二重子音終わり、肯定非過去の挿入母音は-i）

	語幹	肯定非過去	否定非過去	肯定過去	否定過去	連用形	命令形	仮定形

作る	tʃuff-	tʃuff-i-Ø	tʃuff-a-n	tʃuff-i-tai	tʃuff-a-ddan	tʃuff-i-:	tʃuff-i	tʃuff-i-ba
破る	javv-	javv-i-Ø	javv-a-n	javv-i-tai	javv-a-ddan	javv-i-:	javv-i	javv-i-ba

(6) GROUP 2(a-3)　1 語幹動詞（語幹は鼻音で終わり、肯定非過去の挿入母音は-Ø）

	語幹	肯定非過去	否定非過去	肯定過去	否定過去	連用形	命令形	仮定形
読む	jum-	jum-Ø-Ø	jum-a-n	jum-Ø-tai	jum-a-ddan	jum-i-:	jum-i	jum-(i)-ba
死ぬ	sin-	sin-Ø-Ø	sin-a-n	sin-Ø-tai	sin-a-ddan	sin-i-:	sin-i-ru	sin-(i)-ba

(7) GROUP 2(b-1)　2 語幹動詞（肯定非過去の挿入母音は-u/-i）

	語幹	肯定非過去	否定非過去	肯定過去	否定過去	連用形	命令形	仮定形
立つ	tats-/tat-	tats-i-Ø	tat-a-n	tats-i-tai	tat-a-ddan	tat(ʃ)-i-:	tat(ʃ)-i	tat(ʃ)-i-ba
書く	kaf-(kats-)/kak-	kaf-u-Ø	kak-a-n	kaf-u-tai	kak-a-ddan	kak-i-:	kak-i	kak-i-ba
泳ぐ	u:z-/u:g-	u:z-i-Ø	u:g-a-n	u:z-i-tai	u:g-a-ddan	u:g-i-:	u:g-i	u:g-i-ba
隠す	kaffas-/kaffah-	kaffas-i-Ø	kaffah-a-n	kaffas-i-tai	kaffah-a-ddan	kaffaç-i-:	kaffaʃ-i	kaffaʃ-i-ba

(8) GROUP 2(b-2)　2 語幹動詞（肯定非過去の挿入母音は-i）

	語幹	肯定非過去	否定非過去	肯定過去	否定過去	連用形	命令形	仮定形
切る	ki-/kir-	ki-:-Ø	kir-a-n	ki-:-tai	kir-a-ddan	kir-i-:	kir-i	kir-i-ba

以上は GROUP 2 の動詞であり、語幹の種類によって a と b に分かれ、肯定非過去の挿入母音によってさらにいくつかのパターンに分かれる。また GROUP 1 の命令接辞は-ru (ex. mi:-ru)で、GROUP 2 の命令接辞は-i (jum-i)である。これは日本語では命令形は一段動詞なら語幹に-ro をつけ(ex. mi-ro)、五段動詞なら語幹に-e をつける(ex. jom-e)のと似ている。また、GROUP 2 に属する sin(死ぬ)という動詞の命令形は、sin-i とはならずに、GROUP 1 の命令接辞-ru を使って、sin-i-ru となる。

また、口蓋化のルールは以下のとおりである。

(9) t→tʃ / _ i (optional)　　s→ʃ / _ i　　h→ç / _ i

「書く」のような日本語で「く」で終わる五段動詞の対応するものについては、池間方言では肯定非過去と肯定過去の語幹にはf-語幹とts-語幹の両方ある（ex. 書く kaf-/kats-）。通時的には、古典日本語では、過去形は動詞の連用形が「たり」に接続して、終止形とは違う語幹となっている。宮古語のほかの方言（たとえば伊良部方言）を見る限り、池間方言ではもともとf-語幹が日本語の終止形語幹に相当し、ts-語幹が日本語の連用形語幹に相当するものだった考えるほうが妥当である。この場合、おそらく類推によって、f-語幹が連用形に侵入し、過去形にはf-u-taiとts-i-tai両方の形（ex. 書いた kaf-u-tai/kats-i-tai）が生じ

た可能性がある。一方で、ts-語幹は終止形としても使われる（ex. kats-ɨ）。つまり、ts-語幹とf-語幹は現在の池間方言ではまったく同じ振る舞いをしている。おそらく連用形が終止形にとって代わる変化があとで生じたというものであり、これはすべて連用形で統一されている宮古平良方言との言語接触の結果かもしれない。

一方、共時的には、仲間博之先生が提供した語彙集を見る限りでは、f-/ts-語幹の場合、単語の見出しにはほとんど f-語幹で書かれているため、本稿では肯定非過去と肯定過去の語幹の f-/ts-を、同じ形態素/f-/の異形態として扱い、連用形の語幹を k-（ex. 書いて kak-i）にする。

(10) f-/ts-語幹（ex. 書く kaf-u/kats-ɨ）

	肯定非過去	肯定過去
	kaf-u	kats-i-tai
言語接触	kaf-u kats-ɨ	kats-i-tai
類推	kaf-u	kaf-u-tai kats-i-tai
今の池間方言	kaf-u kats-ɨ	kaf-u-tai kats-i-tai

しかし、吹く futs-ɨ という単語は、同じ子音の連続を避けるため、fuf-u とはならないと考える。

1.3 連体形

宮古諸方言の終止形と連体形がすでに同音になっている(狩俣 1999)。池間方言においても終止形そのままの形を使って連体修飾できる。

(10) *ziː=ju kaf-u-Ø.*
字=ACC 書く-THM-NPST
字を書く。（終止形）
ziː=ju kaf-u-Ø hitu.
字=ACC 書く-THM-NPST 人
字を書く人。（連体形）

1.4 日本語との対応

池間方言の GROUP 2 の動詞は日本語と以下のような対応関係が見られる。

(11)

日本語	ワ行五段	-くる	-ぶる	一部のラ行五段	マ行五段
池間方言	母音語幹	ff-	vv-	(r)-	m-
日本語	ナ行五段	タ行五段	カ行五段	ガ行五段	サ行五段
池間方言	n-	ts-/t-	f-(ts-)/k-	z-/g-	s-

2. 湯湾方言

湯湾方言の動詞活用体系は同じ北琉球の沖縄語首里方言とも似ている。

湯湾方言の動詞の語幹は母音語幹と子音語幹に分かれる。各動詞の語幹には基本語幹・連用語幹・音便語幹があり、基底形を基本語幹にする。母音語幹動詞の 3 語幹はすべて同じである。

(12)

	肯定非過去(述語形)	否定非過去	テ形
	連用語幹	基本語幹	音便語幹
起きる	hɨː-jui	hɨː-ran	hɨː-tɨ
立つ	tatʃ-ui	tat-an	tat-tʃɨ

2.1 動詞活用

動詞の活用は以下の表にまとめた。

(13)

	基底形	連用形	肯定非過去	否定非過去	肯定過去	否定過去	テ形	命令形	仮定形
語幹種類	基本	連用	連用	基本	音便	基本	音便	基本	基本
見る	mi-	mi-i	mi-jui	mi-jan	mi-tʃa	mi-jan-ta	mi-tʃɨ	mi-rɨ	mi-riba
起きる	hiː-	hiː-Ø	hiː-jui	hiː-ran	hiː-ta	hiː-ran-ta	hiː-ti	hiː-rɨ	hiː-riba
死ぬ	ʃɨn-	ʃɨn-i	ʃɨnj-ui	ʃɨn-jan	ʃɨ-dʒa	ʃɨn-jan-ta	ʃɨ-dʒɨ	ʃɨn-ɨ	ʃɨn-iba
読む	jum-	jum-i	jumj-ui	jum-an	ju-da	jum-an-ta	ju-dɨ	jum-ɨ	jum-iba
飛ぶ	tub-	tub-i	tubj-ui	tub-an	tu-da	tub-an-ta	tu-dɨ	tub-ɨ	tub-iba
聞く	kik-	kik-i	kikj-ui	kik-jan	ki-tʃa	kik-jan-ta	ki-tʃɨ	kik-ɨ	kik-iba
漕ぐ	kug-	kug-i	kugj-ui	kug-an	ku-dʒa	kug-an-ta	ku-dʒɨ	kug-ɨ	kug-iba
話す	hanas-	hanaʃ-i	hanaʃ-ui	hanas-an	hana-ʃa	hanas-an-ta	hana-ʃɨ	hanas-ɨ	hanas-iba
買う	koːr-	ko-i	koːj-ui	koːr-an	koː-ta	koːr-an-ta	koː-tɨ	koːr-ɨ	koːr-iba
立つ	tat-	tatʃ-i	tatʃ-ui	tat-an	tat-tʃa	tat-an-ta	tat-tʃɨ	tat-ɨ	tat-iba

2.2 三語幹の対応関係

子音語幹動詞の三語幹は語幹末子音によって違う。三語幹および日本語との対応関係を以下の表にまとめた。また音便語幹はタ行五段以外に、すべて基本語幹の語幹末子音が削除される形となる。

(14)

日本語	ナ行五段	マ行五段	バ行五段	カ行五段	ガ行五段	サ行五段	ラ行五段	タ行五段
基本語幹	n-	m-	b-	k-	g-	s-	r-	t-
連用語幹	nj-	mj-	bj-	kj-	gj-	ʃ-	j-	tʃ-
音便語幹	Ø-	Ø-	Ø-	Ø-	Ø-	Ø-	Ø-	t-

2.3 動詞の形態音韻論

2.3.1 連用形

動詞の連用形の基底形は「基本語幹+ -i」とし、以下のルールが適用される。

(15) i → Ø / vowel stems consisting of more than one mora _

ex. hɨː-i → hɨː-Ø

(16) [r/s/t] → [j/ʃ/tʃ] / _ {i/j}

ex. koːr-i → koːj-i(→koi)　　hanas-i → hanaʃ-i　　tat-i → tatʃ-i

このように、-i の影響で出力側の口蓋化した語幹形を連用語幹と呼ぶ。

2.3.2 肯定非過去

肯定非過去の基底形は「基本語幹 + -ju-i」とし、ルールは(16)と同じである。

ex. koːr-ju-i → koːj-ui　　hanas-ju-i → hanaʃ-ui　　tat-ju-i → tatʃ-ui

2.3.3 否定非過去・否定過去

否定非過去と否定過去の基底形はそれぞれ「基本語幹+ -ran」と「基本語幹+ -ran-ta」とし、以下のルールが適用される。

(17) r → j / i(C) _

ex. mi-ran → mi-jan　　ʃin-ran → ʃin-jan

(18) r → Ø / elsewhere

ex. kug-ran → kug-an

2.3.4 肯定過去・テ形

肯定過去とテ形の基底形はそれぞれ「基本語幹+ -ta」と「基本語幹+ -tɨ」とし、表層形になるまでのルールは同じである。ここでは肯定過去のルールを例として挙げる。

(19)

入力	①口蓋化	②有声化	③脱落	出力
mi-ta	mi-tʃa			mi-tʃa
hɨː-ta				hɨː-ta
ʃin-ta	ʃin-tʃa	ʃin-dʒa	ʃi-dʒa	ʃi-dʒa
jum-ta		jum-da	ju-da	ju-da
tub-ta		tub-da	tu-da	tu-da
kik-ta	kik-tʃa		ki-tʃa	ki-tʃa
kug-ta	kug-tʃa	kug-dʒa	ku-dʒa	ku-dʒa
hanas-ta	hanaʃ-ta		hanaʃ-a	hana-ʃa
koːr-ta			koː-ta	koː-ta
tat-ta	tat-tʃa			tat-tʃa

出力側の語幹を音便語幹と呼ぶ。上の表のように音便語幹の後にくる接辞は音便の影響で異形態が多く現れる。

2.3.5 命令形・仮定形

命令形と仮定形の基底形はそれぞれ「基本語幹+ -rɨ」と「基本語幹+ -riba」とし、以下のルールが適用される。

(20) r → Ø / C _

ex. ʃin-rɨ → ʃin-ɨ　　tub-riba → tub-ɨba

2.3.6 連体形

日本語では、いわゆる終止形と連体形は同じ形になっているが、湯湾方言では「終止形+ -n」が連体形となる。以下のルールが適用される。

(21) {i/n} → Ø / _ n

ex. jumjui-n → jumju-n　　juman-n → juma-n

3. まとめ

日本語はテ形・過去形とそれ以外の語幹が違うだけで、最大で 1 つの動詞につき 2 つの語幹がある。また、基本的に動詞の活用は語幹に接辞をつけるだけで、膠着的である。さらに、終止形と連体形が同じ形となっているといった点では、池間方言の動詞活用と似ている。一方、湯湾方言において、-t で始まる接辞には数種類の異形態があるように、接辞の種類が日本語標準語より多いといえよう。また、日本語の「くる」「ぶる」で終わる動詞とそれ以外の「る」で終わる五段動詞とは池間方言では違う語幹を持つ動詞に対応する。また首里方言でも日本語の「ぶる」「びる」で終わる五段動詞とそれ以外の「る」で終わる五段動詞とは違う語幹を持つ動詞に対応するので、日本語の「くる」「ぶる」「びる」で終わる五段動詞とそれ以外の「る」で終わる五段動詞は湯湾方言においてそれぞれどのような語幹に対応するか今後の課題にする。

略語一覧：

ACC: accsative 対格　THM: thematic vowel 語基母音　NPST: non-past 非過去

参考文献：

狩俣繁久(1999)「宮古諸方言の動詞「終止形」の成立について」日本東洋文化論集(5): 27-51

池間・湯湾方言の補助動詞構文に関して

林　智昭
日本学術振興会特別研究員 PD（京都大学）

1.　はじめに

本稿では、2016 年 8 月の調査において収集を行った南琉球池間方言・北琉球湯湾方言のデータに基づき、補助動詞構文に関する対照研究を行うことを目的とする。本稿における議論が立脚する言語データは、(i) 池間方言に関しては、インフォーマントの作成による例文データに筆者が発音表記を付したもの、(ii) 湯湾方言に関しては、筆者らが所属する「動詞班」のグループが行った調査において収集した書き起こしのデータ、をそれぞれ用いる。以下の議論は、収集したデータの範囲において展開するが、必要に応じて先行研究への言及を行う。

2.　補助動詞構文

本節では、補助動詞構文に関して比較を行い考察を進める。具体的には、池間方言、湯湾方言の比較対照を行う。議論を進めるにあたり、本節では、両方言において「進行」「完了」を表すものを取り上げ、本動詞との比較を行う。

2.1　南琉球池間方言

本節では、「進行」「完了」を表す補助動詞に関し、本動詞との比較を行う。

本調査では、標準語で「テシマウ」形になる機能を調べた。池間方言における「進行」を表す補助動詞に *ui* がある。以下に例文を示す。

(1) ba:　　tudz=tu　jugataijuhi:=*ui*
　私は　妻=と　懇談して=*いる*。
　cf.　midun=na　　ja:n=du　*ui*
　　女（妻）=は　家=に　*居る*。

(1) の *ui* はアスペクトを表し、存在動詞「いる」を表す語彙が文法化したものとされる（林 2009）。*ui* 形は、日本語の「テイル」形に対応するものとされる（林 2013: 126）。

次に、日本語の「テシマウ」形に対応する補助動詞の調査を行った。このようなアスペクトを表すのに用いられる補助動詞 *nja:n* は、林 (2009) では存在動詞「ない」を表す語彙が文法化したものであるとされる。本調査においても、*taci:/tati:=nja:n*（「立たない」）や *jumi:=nja:n*（呼ばない）などにおいて *nja:n* が観察されている。

(2) a.　karja:　itara:n　munui=ja　adʒa:i:　tsɨmudi:=*nja:n*
　　彼は　馬鹿な こと=を　言われて　怒っ=*てしまった*。
　b.　ka:n=kai　hairi:　tsɨn=na　nmahi:=*nja:n*
　　川（井戸）=に 入って 着物=を　濡らし=*てしまった*。
　c.　amerika ju:=kara　jamatuju:=nkai　ka:raihari:=*nja:n*
　　アメリカ世=から　大和世=に　変わって=*いってしまった*。

また、*nja:n* は、日本語における「テイク」形に対応する池間方言を調査したときにも観察された。(3) に例文を示すが、ここでは「完了」を表す補助動詞として用いられていることに注意されたい。

(3) a. karja: hitumuti idi:hari:=*nja:n*
彼は 朝 出＝て行った。
b. funja: nnatu=kara hanari:=*nja:n*
船は 港=から 離れ=て行った。

2.2 北琉球湯湾方言

本節では、湯湾方言における「進行」「完了」を表す補助動詞構文を中心に挙げ、比較検討を行う。

まず、湯湾方言の補助動詞 *ui* は、池間方言の *ui* と同じく「進行」を表し、本動詞「居る」に由来する。

(4) nama eiga=ba mitʃ=*ui*
今 映画=を 見=ている。
cf. innu *ui*
犬が 居る。

次に、「完了」を表す補助動詞 *ɨittʃi* をみる。対応する本動詞を以下に挙げる。

(5) kju:=ja nu: ko:=*ɨittʃi*
今日=は 何を 買っ=てきた？
cf. ʒiro:ja arannə:nʃi, taro:=ga/du *ttʃa*
次郎じゃ なくて 太郎=が 来た。

これらは、日本語の「テクル」形に対応するものと考えられる。*ttʃa* は本動詞 *kjui*（「来る」）の過去形である。

一方、本動詞 *ikjui*（標準語「行く」）に関しては、(6) に示すような形式で補助動詞化して用いられている。*ikjui* は「ない」に由来する池間方言の *nja:n* とは異なり、本動詞が補助動詞化したものである点が異なる。

(6) a. uri=ba hakukatʃi/hakuttʃi iriti mut=*tʃiikjui*
これ=を 箱の中へ 入れて 持っ=ていく。
b. ʃigutu=ʃui tuki, kun huku=ba ki=*tʃiikjui*
仕事=する とき、 この 服=を 着=ていく。
cf. uiʒi ankatagadi *ikjui*
泳いで 向こう側へ 行く。

3. おわりに

本稿では、池間方言、湯湾方言の補助動詞構文に関して「完了」「進行」を表す補助動詞構文についての比較検討を行った。池間方言、湯湾方言の補助動詞構文にはこれまでにみてきたような差異が存在する。*nja:n* の (2) にみられる用法が、湯湾方言の *ui*（「居る」）には存在しないことは、その一例として注目に値するものである。

今後の課題としては、例えば池間方言の *nja:n* などに関し、文法化の程度性といった観点から変化の進行度を検討していくなど、共時的に観察される言語現象の分析を通して言語変化との関係を分析したいと考えている。

参考文献

林由華. 2009.「琉球語宮古池間方言の談話資料」『地球研言語記述論集』1: 153−199.
林由華. 2013.「南琉球宮古後池間方言の文法」京都大学文学研究科, 博士論文.

池間方言と湯湾方言の指示代名詞

原　礼実
（東京外国語大学国際社会学部）

池間方言の指示代名詞

池間方言の指示代名詞は、表 1 の通りである。

表 1

人・物		場所		修飾の形式	
kui	これ	kuma	ここ	kunu	この
ui	それ	uma	そこ	unu	その
kai	あれ	kama	あそこ	kanu	あの

池間方言の指示代名詞には、ku/u/ka の 3 つの系列がある。unu/kunu の使い分けについては現段階では分かっていない。

(例文)

ku 系

- kunu 形

(1)　[kunu hun nu vvan fi:di]
　　この本をあなたにあげる

u 系

- ui 形

(2)　[ui ga kutainnai]
　　それが答えになる

ka 系

- kama 形

(3)　[kamanu ja:ja ju: kamaja:]
　　あそこの家はとても遠い家だ

- kanu 形

(4)　[kanu ja:ja ka:mak]
　　あそこの家はとても遠い家だ

[kai](あれ)に関して、対格の形式として karuu（あれを）が見つかっている。r が、何が原因によって現れるものであるのかの調査が今後の課題である。

湯湾方言の指示代名詞

湯湾方言の指示代名詞は、表 2 の通りである。

表 2

人・物				
単数		複数		
kuri	これ	kuriŋkja:	kutta:	これら
uri	それ	urinkja:	utta:	それら
ari	あれ	arinkja:	atta:	あれら

場所		修飾の形式	
kuma	ここ	kun	この
uma	そこ	un	その
ama	あそこ	an	あの

池間方言の指示代名詞には、ku/u/a の 3 つの系列がある。

kuriŋkja: / urinkja: / arinkja:、及び kutta: /utta: /atta: を,人を指すのに使う際は、マイナス目上に用いられる。それぞれ意味は「こいつら」、「そいつら」、「あいつら」というようになる。プラス目上にも使用可能な「この人たち」、「その人たち」「あの人たち」という表現は、修飾の形式に[tʃuŋkja](人たち)を付けて、それぞれ kuntʃuŋkja / untʃuŋkja / antʃuŋkja となる。

(例文)

ku 系

- kuri 形

(5) [kurija atta: mundo]

「これはあの人たちのものだ」

(6) [uranɨn kurɨba kurijui]

「君にこれをあげる」

(7) [urakaci kurɨ kurijui]

「君にこれをあげる」

- kurɨŋkja:形

(8) [kurɨŋkja: dəː]

「これらは竹だ」

(9) [kurɨŋkja: huku]

「これらは服だよ」

(10) [kurɨŋkjan huku]

「これらは服だよ」

(11) [kurɨŋkjanu huku]

「こいつらの服」

- kuma 形

(12) [sanʒinin kuma katʃikoː]

「3 時にここに来い」

(13) [kumanan an dəː]

「ここにある竹」

(14) [kumakara attʃikoː]

「ここから歩いていけ」

- kun 形

(15) [kun dəː]

「この竹」

(16) [kummichiba akkjui]

「この道を歩く」

(17) [kunnu mun ja taruga muʃitʃi]

「この飲み物は誰が持ってきたのか」

(18) [kuntʃuŋkjanu dəː doː]

「この人たちの竹だよ」

u 系

- urɨ 形

(19) [uri turɨ]

「それ取って」

(20) [urija waːkjaː mun ja arankai]

「それは私達のものだよ」

(21) [urəː mjaŋkjadoː]

「それは猫たちだよ」

- urɨnkja:形

(22) [urɨŋkja: dəː]

「それらは竹だ」

(23) [urɨŋkjaːnu dəː]

「そいつらの竹」

- utta:形

(24) [utta: dəː doː]

「それらの竹だよ」

(25) [utta: dəː]

「そいつらの竹」

- uma

(26) [umanan huttʃuːnɨntəːnu hussaː]

「そこに大人がたくさんいた」

- un 形

(27) [un honba wannin kartʃikurɨrɨ]

「その本を僕に貸してください」

(28) [untʃuŋkjanu dəː]

「その人たちの竹」

a 系

- arɨ 形

(29) [arɨ mutʃikoː]

「あれ持って来い」

- arɨnkjaː形

(30) [arɨŋkjaː dəː doː]

「あれらは竹だよ」

(31) [arɨŋkjanu dəː]

「あの人なんかの竹」

- attaː形

(32) [attaːja: taroːtaːʒata]

「あの人たちは太郎たちだった」

(33) [attaː hon]

「あの人たちの本」

(34) [attaː dəːdoː]

「あいつらの竹だよ」

(35) [attaːtu mazin asɨdattoː]

「あの人たちなんかと一緒に遊んだよ」

(36) [attaːttai]

「あの人たち二人」

(37) [attaːnu ttai]

「あの人たち二人」

- ama 形

(38) [amanu dəː]

「あそこの竹」

(39) [amanan an dəː]

「あそこにある竹」

(40) [amakatʃi attʃiike]

あそこに歩いていけ

(41) [amananti kamoː]

「あそこで食べよう」

(42) [amanu isɨnantɨ kamoː]

「あそこの椅子で食べよう」

(43) [amakumanan nunkui ʔukuna]

「あちこちになんでも置くな」

- an 形

(44) [antʃuja taroːʒa]
「あのひとは太郎だ」

(45) [annuseːja dekɨmundoː]
「あの青年は頭が良いぞ」

(46) [antʃunu hon]
「あの人の本」

(47) [antʃuŋkjanu hon]
「あの人たちの本」

(48) [antʃuŋkjanu dəːdoː]
「あの人たちの竹だよ」

(49) [antʃuŋkjakara kitʃa]
「あの人から聞いた」

「あの人たちから実際に聞いた」

(50) [antʃuŋkjanu məːra kitʃa]

attaːについては、注意点がある。

[arɨŋkjaːnu dəː doː] 「あれらの竹だよ」

[antʃuŋkjanu dəːdoː] 「あの人たちの竹だよ」

[attaː dəːdoː] 「あいつらの竹だよ」

これら 3 つは自然な用法として使用可能であるのに対し、

[attaːnu dəːdoː] *

は、不自然な表現となってしまう。つまり、attaːは基本的には指示代名詞であるが、属格にした際、attaː nu と表現できない点、人称代名詞的性格を持っているといえる。

宮古池間方言・奄美湯湾方言・日本語標準語における人称代名詞

東京外国語大学国際社会学部１年　谷津もゑり

【宮古池間方言の人称代名詞の体系】

(表１)

人称代名詞	単数	複数
一人称	ba/ban/banu	banti
二人称	vva	vvaru
三人称	kai	kanukja/unukja/kunukja

池間方言の人称代名詞の体系は表１の通りである。

① 一人称単数の形式は ba が主に格に接続されるが、ban は特定の格のみに接続され、また banu は与格、対格に見られたため、この場合、ban が banu から u が次第に抜け落ちたのではないかと思われるが、現段階では分かっていない。形は不規則に変化する。

② 一人称複数の banti は与格と属格においては見つけられたが、対格においては bant に続く後続の形が異なった。banti という形は主格においては出現しなかった。除外、包括の規則性の有無は見つけられなかった。

③ 二人称において、池間方言においては目上、目下に対する呼称の変化は見つけられなかった。

④ 三人称の彼と彼女を同様の形式によって表現する。

⑤ 属格においては、一人称複数を除いた例文に共通して、人称代名詞の後ろに ga が続いた。

【一人称単数】

主格　私がうっかり倒れた。

baga nautʃaːnjaː tauitai

与格　私に本をください。

banun/ban hunnu fiːsamatiː

対格　私を村まで連れて行ってください。

banuu sumataaçii saari ikii

属格　私の財布がない。

baga saifuː njaːn

【一人称複数】

私たちは踊りが上手だ。

bantaa buduinu/ja dʒauzu

与格　私たちに本をくれる。

bantin hunnu fii

対格　私たちを褒めた。

bantʃuː humitai

属格　私たちの家

bantigaja

【二人称単数】

あなたは他人ではない。

vva(a) çitu aran

与格　この本をあなたにあげる。

kunu hun nu vvan fiːdi

属格　あなたのペンを見せて。

vvaga pennu mi ʃiː fiːru/mi ʃiru

【二人称複数】

あなたたちは他人ではない。

vvaruu çitu aran

対格　先生があなたたちを褒める。

shiːshiːga vvaruː humitai

【三人称単数】

主格　彼が本を読む。

kaiga hun nu jun

与格　彼にお金をあげた。

kain dinnu fiːtai

属格　彼の耳

kaiga min

【三人称複数】

主格　彼らが殴った。

kanukjaga ttatsutai/nadʒuitai

与格　彼らにお金をあげた。

kanukjan dinnu fiːtai

属格　彼らの家には馬がいる。

kanukjaga jaːnna nuːmanu duːi

【奄美湯湾方言の人称代名詞の体系】

(表２)

人称代名詞	単数		双数	双数/複数	複数
一人称	wan		wattari	waːkja + ttai	waːkja
二人称	＋目上	nan	nattai natteː	naːkja + ttai	naːkja naːkjaja
	一目上	ura	urattai	urakjaː + ttai	urakja
三人称	antʃu (「あの」のみ)		attaːttai attaːnu ttai (「あの」のみ)		attaː (kuttaː) (uttaː) ariŋkja kuriŋkja uriŋkja

湯湾方言の人称代名詞の体系は表２の通りである。

① 一人称単数の属格において、wan ではなく、wamba と表記されているが、音が wan であるため、wan の使用域とする。

② 一人称複数の除外、包括の有無は見つけられなかった。

③ 二人称の目上もしくは、目下、同世代に対しての呼称の変化を発見できた。

④ 双数専用の形式が見られた。

⑤ 今回、話者の言葉から、ttai をつけることで、双数の場合も複数の場合も使用可能な形式が見られたが、現段階では詳しくわかっていない。

⑥ 属格においては、人称代名詞の後ろを長母音化する現象がどの例文にも見られた。

⑦ 今回の話者によると、三人称複数の attaː、kuttaː、uttaːは長母音化しないことも稀にあるとのことである。

⑧ 対格においては、人称代名詞の後ろに ba が続く現象がどの例文にも見られた。

⑨ 三人称は専用の形式はなく、あの人、というように指示代名詞によって表現される。

⑩ 人称代名詞と、話者が尊敬の意を持つ人に対しての主格は「が」が付き、目下の人に対しての主格は「ぬ」が付く。

⑪ 「あの」という意味の場合のみ、三人称単数、三人称双数の形式を発見できた。「彼、彼女」といった呼称はなく、代わりに「あの人」という形式を用いる。

⑫ 三人称複数形は attaː, kuttaː,uttaː,ariŋkja,kuriŋkja,uriŋkja があるとしたが、使う用法がその時々に異なるため、現段階では正確にはわかっていない。

【一人称単数】

主格　私が本を貸しますよ。

waŋga hon karaʃussa

与格　私にお金をください。

wannin kani kuriti kuriri

その本を私に貸してください。

un honba wannin kartʃikuriri

対格　私を君の友達にしてくれないか。

wamba uraː dusin ʃikkuriraŋkai

属格　私の髪の毛を引っ張らないで。

waː/wannu/wan kamatʃin çigiba çippanna

【一人称複数】

主格　私たちが走る番だ。

waːkja ga/nu haʃijumbando

与格　私たちに君たちの趣味を教えてくれ。

waːkjanin/waːkjan/waːkjakaci urakjaː ʃumiba jusitikuriri

対格　私たちをあなたたちの弟子にしてください。

waːkjaba naːkjaː deʃikaci ʃikkuriri/ʃitaboːre

属格　お前らは私たちの宝物を持って行った。

urakjoː waːkjaː takaramumba mucci iʒa

【二人称単数】君・お前

主格　お前が持ってきたものを片付けなきゃ。

uraga muʃitʃasseː katazikiramba

与格　君にこれをあげる。

uranin/urakaci kuriba kurijui

対格　先生が君を探しているよ。

ʃenʃeiga uraba tumutuddo

君を大事にする。

uraba təːnin ʃui/deːʒiniʃui

属格　私を君の友達にしてくれないか。

wamba uraː dusin ʃikkuriraŋkai

【二人称単数】あなた

主格　あなたが言うことは難しい。目下/目上

nanga ʔjunkutuja mutsikasjaja./mutsikasjaja (j)uttoː

与格　その本をあなたに貸します。

un homba uranin karasoː

対格　あなたを愛している。(好きだ。)

namba sukidajotto

属格　私はあなたの子供です。

wanna naːkkwadoː

【二人称複数】君・お前

お前らは私たちの宝物を持って行った。

urakjoː waːkjaː takaramumba mucci ɨʒa

与格　君たちに食事を与えよう。

urakjan haməː kamasoː/kuriroː/turasoː

対格　君たちを一人前にしよう。

urakjaba icinimməːci siramba

属格　私たちに君たちの趣味を教えてくれ。

waːkjanin/waːkjan/waːkjakaci urakjaː ʃumiba jusitikuriri

【二人称複数】あなた

主格　あなたたちがやってください。

naːkjaga ʃitaroːri

与格　あなたたちに聞きたいです。

naːkjakaci/ naːkjan kikitʃasa

対格　あなたたちを大きくしたのはあの人です。

naːkjaba hudəːʃi kuritantʃuja antʃudoː

属格　私たちをあなたたちの弟子にしてください。

waːkjaba naːkjaː deʃikaci ʃikkuriri/ʃitaboːre

【三人称単数】

主格　あの人が本を貸してくれたので助かった

antʃuga kunu hon karaʃammun nati wanna tasukata

属格　あの人の本

antʃunu (×antʃuga) hon

【三人称複数】

あいつら(の)/こいつら/そいつら

ariŋkja (△attaːnu)/kuriŋkja/uriŋkja

属格　あいつらの竹だよ

attaː dəːdoː

あれらの竹だよ。

ariŋkjaːnu/ariŋkjanu dəː doː

こいつらの竹

kuttaː dəː

こいつらの服

kuriŋkjanu huku

その人たちの/この人たちの/あの人たちの竹だよ。

untʃuŋkjanu/kuntʃuŋkjanu/antʃuŋkjanu dəːdoː

あの人たちの本　ga は×

antʃuŋkjanu/attaː hon

【一人称双数】

※先生は私一人だよ。

∫en∫eija want∫uido:

先生は私たち二人だよ。(私たち二人 wattari/wattai/wakja:ttai)

∫en∫eija wattaido:/wantai

※先生は私たち三人だよ。(※私たち三人 wa:kja:mit∫ai/wa:mit∫ai)

∫en∫eija wa:kja: sammeido:

属格　私たち二人の服

wakja:ttainu/watte:nu/wattarinu (×wattari:　△wattarin) huku

【二人称双数】　君・お前

※君たち三人

urakja: mit∫ai

属格　お前たち二人の竹

urattenu də:

【二人称双数】　あなた

属格　あなたたち二人の服

nattainu (×nattai) huku

【三人称双数】

あの人たち二人

atta:ttai/atta:nu ttai

※補足として、双数以外の表現を挿入した。

【宮古池間方言・奄美湯湾方言・日本語標準語の比較】

<双数について>

双数は、日本語標準語では、「私たち二人」、というように、「〇〇+二人」として、二つの単語をくっつけて表現することになる。池間方言には双数は見つけられなかったが、湯湾方言においては双数を専用として用いる形式が見られた。

<一人称、二人称、三人称の形の変化について>

池間方言の一人称単数の形は後に続く格によって不規則に変化するが、日本語標準語の一人称単数の形は格に関わらず変化しない。また、日本語標準語は人称に格助詞を続けることでそれぞれの格を表現するが、池間方言や湯湾方言は人称の母音を長母音化し、その状態で格を表現することがある。

編者・著者紹介（2016 年 11 月時点）
＊大学名の後ろのカッコは、教員・研究員は職名・身分、学生は所属学科・学部を示す。

【編者】

新永悠人（にいなが・ゆうと）	成城大学（非常勤講師）
下地理則（しもじ・みちのり）	九州大学（准教授）
占部由子（うらべ・ゆうこ）	九州大学（大学院人文科学府）

【著者】

麻生玲子（あそう・れいこ）	東京外国語大学（大学院総合国際学研究科）
占部由子（うらべ・ゆうこ）	九州大学（大学院人文科学府）
奥真裕（おく・まさひろ）	東京外国語大学（大学院総合国際学研究科）
加藤幹治（かとう・かんじ）	九州大学（文学部人文学科）
黒島規史（くろしま・のりふみ）	東京外国語大学（大学院総合国際学研究科）
呉唯（ご・ゆい）	東京外国語大学（大学院総合国際学研究科）
佐久間篤（さくま・あつし）	南山大学（大学院人間文化研究科）
陶天龍（たお・てぃあんろん）	東京外国語大学（言語文化学部）
林智昭（はやし・ともあき）	日本学術振興会特別研究員（PD）
原礼実（はら・あやみ）	東京外国語大学（国際社会学部）
谷津もゑり（やつ・もえり）	東京外国語大学（国際社会学部）

Intensive Language Course 2016 The Ryukyuan Languages: basic vocabularies and grammatical outlines

2016 年度言語研修「琉球語」
成果報告書

平成 29 年 3 月 27 日　　発行

編者　下地理則・新永悠人・占部由子

発行　東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所
〒183-8534　東京都府中市朝日町 3－11－1
TEL.　042－330－5600

印刷　日本ルート印刷出版株式会社
〒135-0007　東京都江東区新大橋 1－5－4
TEL. 03－3631－3861

Copyright © Individual Contributors
ISBN　978-4-86337-232-0

ISBN 978-4-86337-232-0